
失墜

ゆかこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失墜

【Nコード】

N3145K

【作者名】

ゆかこ

【あらすじ】

「愛されすぎていた」女・麻と、その周りを囲む、人身売買に何らかの關係を持ち、麻を溺愛する男たち。快樂と愛の痛みに墮ちていく麻と、その傍らで見守る友人たち。彼女の愛の行方は、どこへ消えた。

「おい、絵実？」

こてん、と横たわる女の体。陽がいくら触れようが、それは動くことをしなかった。浅い呼吸だけが耳に入る。不味い、と陽は顔を顰めた。また、売り物を壊してしまったのだ。

「あ、何をやっているの、それは来月にアーク様にお渡しする予定の娘だったのに！」

慌ててその体を毛布に包んでいると、百合が部屋に入ってきた。煙草の匂いをぶんぶんさせながら、昭和の女の空気を醸し出している。女主人らしく、彼女はキツと陽を睨んだ。

「こ、壊した訳じゃないんです。たぶん、まだ息は……」

「ないわよ」

百合は顔を歪め、大きな溜息を吐きながら、青白い顔で横たわっている女の手首と首元に触れた。それに続き、陽も手を触れたが、生暖かいその肌はすでに硬くなっていた。死んでるじゃない、と百合は面倒臭そうに携帯電話を取り出した。

「処理は私がしておいてあげるから。早くそこら辺の娘でも連れてきて、ここ、掃除させなさいよね」

絵の具と水、そして血にまみれた床を、百合は顎で指し、携帯電話を耳に押し当てたまま部屋を出て行った。陽は肩を落とし、外から入ってきた女中に声を掛けた。

「ごめん、麻を呼んできて」

「あ、はい。でも、確か麻は依子様と本日はご一緒では……」

「いいよ。依子には俺が謝っておくから、とにかく麻を連れてきて」

陽が面倒くさそうに、しかしおろおろと言うと、矛盾した陽の態度に違和感を感じたような表情をしながら女中は頷き、出て行った。

人身売買、という言葉を身近に感じる人間はそういないだろう。

少なくとも、日本ではそうであるはずだ。けれど、陽たちは違った。人身売買、特に裏企業などを経営する富豪家のメイドや女中を育成し、派遣するのが目的の会社に勤めているのだ。当然、社は国外にあり、買い付けもすべて国外で行われている。そのなかで、最も危険ともいえる日本支社に勤めているのが陽たちなのだ。見つければ、どんなことになるかは分からない。怖いのは日本警察からの刑よりも、本社からの弾圧と攻撃、そして刑だ。それを覚悟でやっているため、陽や百合に戸惑いはなかった。

「今月は所属85人中、14人ですか……。厳しい世の中ですねえ」

「仕方がないでしょう？　ウチの会社は通常派遣と違って人員も優秀だし、何よりも終身雇用だから好きにできる。まあ、一番の差は本人に自由や権利を与えない、ということでしょうけれどね」

「それにしても、不味いですよ」

「そうね。そのうちクライアント集めには行くわ。それより、あなたは育成と教育に力を尽くせば結構」

年々悪化していく経済に伴い、膨大な財産を抱え裕福だった陽の会社も、日々状態は悪くなっていた。が、支社長である百合にこの

不安を話しても、仕事に専念しろと冷たくあしらわれるだけだった。複雑で緻密な情報管理組織でもあるため、ストレスは絶えない。そんななかで、唯一陽が心を許していたのは、ある日百合が新しい‘商品’候補だといって連れてきた、一人の女だった。

その娘は、目を見張るほどの美人では決していない。漫画やドラマの主人公のように、気が強く意思が強い訳でもない。だが、その儚さを秘めた瞳に、陽は一瞬にして心を奪われた。それは恐らく、単なる一目ぼれというものだったのだろう。百合は特に変わった様子もなく、普通に商品としてその娘を扱っていたからだ。だが、陽には構わなかった。その娘を、百合は「麻^{あさ}」だと紹介した。今から自分が何をされようとしているか、彼女は分かっていたのだろう。特に抵抗することもなく、その無垢にも見える瞳を常に伏せながら、微笑ともいえる表情を浮かべ、彼女は話した。

『宮村です。お世話になります』

程よく低い、中性的な声だ。陽は思わずその姿と声に頷いたものだ。百合は、いつも商品として教育する娘には、膝までの丈がある真っ白なワンピースを着せていた。やつれているともいえるほどに痩せている麻は、そのワンピースがよく似合っていた。

「陽さん、失礼致します。入ってもよろしいでしょうか」

「いいよ。だから、僕の部屋に入るときはさ、そういう言葉使わないで」

「すみません。失礼致します」

謝罪の言葉を繰り返しながら、絵の具や血液で散らかった部屋に、麻は入った。一瞬その様子を覗いたが、直ぐに、彼女は陽の目を見つめた。笑いながら、陽は麻を抱き寄せる。

「やめてくださいよ、子供じゃあるまいし」

「黙って言うこと聞いて」

「いいえ」

麻はそれだけ言うと、未だにあの不思議な微笑を浮かべながら、さつと陽から離れていった。麻が素っ気無いのはいつものことだ。大抵の‘商品’は陽に特別に扱われると悦ぶ。しかし、麻は別だった。決して陽の愛情を受けようとはせず、一方的に愛を与えられるだけの立場を誇っている。

「まあ、とにかく。絵実が駄目になったから、絵を描かせて」

「いいですよ。ただしコスプレなら遠慮しておきます」

「ああ、服はそのままでもいいから」

「当たり前でしょう」

麻は不満そうに呟き、それでもひょこひょこ陽が指定した椅子に腰掛けた。

「それにしても。陽さんって画家志望なんですね」

「ああ、やくざな商売してる割りにはね」

「まあ、そうですね。私を売ろうとしているわけですし」

「おい、その口の聞き方はないだろう？」

陽はふざけつつ、笑った。麻の口角は上がっているが、目は笑っていない。その表情からは、相変わらずあの奇妙な微笑が読めた。

「さて、描くなら早く描いて下さいませんか。まだ私が残ってるうちに完成品を見せて頂きたいなあ、と」

麻の言葉に苦笑いしながら、陽は筆を取った。

「あー、陽ちゃーん、新作？ それ、麻ちゃん」

「依子、相変わらずだね」

「いいでしょ。そんなことよりー、麻ちゃん奪っていくのやめてよお、あの子可愛い」

麻のスケッチを一通り終え、社員寮でスケッチブックを捲っていた陽の肩を、不意に依子が覗き込んだ。いつものGパンに、灰色のTシャツを着ている。

「いつか画家になったら、私のことでも描いてよねー。麻ちゃんは可愛いけど、そのうち、いっちゃうし」

「……うん」

何も考えずに、陽は呟いた。依子は怪訝そうに彼を見たが、ふつと笑い、すぐに部屋を出て行った。何のための訪問だったのかもわ

からず、陽は首をかしげながらも、作業を再開した。どうして、これほどまでに揺らいているのだろう。小さな疑問を脳裏に浮かべながら、陽は、薄い紙の上の笑っている麻の頬をそつと撫でた。

「おはようございます、陽様。朝食はいつものものをご用意させて頂きました、ご希望がございましたらどうぞお伝えくださいませ」

社員寮のやや固いベッドで朝を迎えたあと、最初に聞くのはメイド育成化の商品候補たちの声だ。もちろん、麻はそのなかにはいない。が、黒いワンピースに真っ白なエプロン、綺麗に結われた髪というのは、男ならば誰でも喜ぶ光景であろう。

「おはよう。今日は朝食、いらないかな」

「お顔色も優れませんが……」

「大丈夫。それより、宮村を」

商品候補の手を振り切り、陽はむくりと起き上がった。目を開いて、一番最初に浮かぶのは、やはりあの女なのだ。あの無愛想で大きくて美人でもない女を想ってしまったことに、陽は無性に自身に対して腹が立っていた。

「麻、貴女もいいご身分ですね、あんな男と付き合っているとは」
「……」

麻は体を震わせ、そつぽを向いた。痩せた腕は縛り付けられ、部屋の低すぎるほどの温度に、か細い声を出している。一日の仕事を終え、眠りににつき、朝起きるとこのような状態になっていた。

「やめてよ……」

「貴女はなんの権利があつてそんなこと言ってるんですか？」

耀と呼ばれた男は、まるで紙に描かれた絵のような綺麗な顔をしていた。澄んだ瞳と綺麗な髪は、誰がどう見ても、美青年だった。だが、麻にはそれに見とれるほどの余裕がない。

「私は、陽様と付き合つてなんかない！ 馬鹿じゃないの？」

「じゃあ、これはどういう意味でしょうかね」

耀はすつと綺麗な手で髪をかき上げ、麻の前に写真を置いた。麻は縛られたままの腕は使わず、どうにか腰をくねくねと回し、写真に目をやった。

「これ、昨日の！」

麻の叫びに、耀は小さく微笑んだ。

「いいものを見ました。焦ってる貴女なんて久しぶりですからね」
「これ……」

目の前に置かれた写真。それは、陽と麻が抱き合っている写真だった。実際はほんの数秒ほどだったはずのことが、写真で見ると、まるで狂ってしまったかのように激しく愛し合っているように見えなくも無い。この男はそれを知らずにやっているのか、否、それともわざわざ隠しているのか。間違いなく後者の方であろう。

「百合に知れたらどうなることか……」

大袈裟に困ったような表情を作り溜息を吐いた耀を見かね、麻は脚をじたばたと動かした。

「とりあえず、これ、とつてよ！」

「嫌ですよ。焦ってる貴女ほど愉快なものはありませんね」

実際、そうだった。麻は買われる側、奴隷として働く側にありながら、常に奇妙な微笑を浮かべ、落ち着き払った態度で人に接していた。耀には、それが面白くなかったのだろう。冷や汗を流した麻を見、彼はさらに冷酷な笑みを深めた。

「で？ どうするんですか？ あの男とまだイチャイチャするつもりですか」

「そんなわけないでしょう？！ 私だって、好きでやってたわけじゃない」

麻は瞬間、寂しそうな、悲しげな表情を見せた。それは到底作り物や嘘には見えない表情だった。耀は一瞬驚き、麻を拘束する手を緩めたが、すぐに落ち着きを取り戻した。

「まあ、そこは譲ってあげますよ。私もそこまで悪趣味ではない」

耀はそう呟き、麻を椅子に括りつけたまま、部屋を出て行った。

「さて、と。貴女はいつになったらけじめというものが分かるんでしょうかね？」

耀は意外にもあつさりと、数分後に片手に資料を抱えたまま、戻ってきた。どうやら、この紙の束を取りに戻っただけらしい。

「……はじめ、って。はじめなものもないじゃない」
「そうですね」

蕩けるような儚げな瞳で見つめる麻を縛る金具を解き、耀は麻を抱き寄せた。陽がしたのと同じように、まるで壊れものを扱うかのように、そつと、そつと。麻は抵抗の色を瞳に浮かべたが、相変わらず焦りの表情は消えていない。そんな麻の様子を気にすることはなく、耀は麻をさらにきつく抱きしめた。

「やっぱり、あなたは卑怯」

睨みつけながらも抵抗はしない麻の目を見つめ、耀はその柔らかな唇に深く口付けた。

「卑怯なのは、どっち」

麻が再度、耀を睨み返すと、耀はすでに二度目の接吻を交わそうと、麻の肩に手を添えていた。

「ん…、もう終わり」

波のように、毛布やシーツがしわになっっているベッドの上。すっかりくしゃくしゃになったシーツに包まりながら、麻がぼそりと呟いた。その動作に、耀は再び抱き寄せ、軽いキスを落とした。

「……だから、ダメだってば。それよりさ、私の話、聞いてよ」
「何？ もうダークな身の上話は飽きましたよ」

耀が肩をすくめると、麻はずきずきと重い痛みを訴える腰を、寝転んだまま擦った。

「いいでしょ、別に」
「ま、いいか」

耀の言葉に、麻はさっと起き上がり、白いシーツを体に巻きつけた。

「……んー、なんか萎える。やっぱりいいや」
「何ですか、それ」

急にぐったりと脚を投げ出した麻を見やり、耀はくるりと麻の方を向いた。

「ねえ、耀。名前を呼んで」
「はい？」
「だから。名前を呼んで？」

麻の言葉に、耀は微笑んだ。細い手首を取り、茶色がかかった髪をそつと撫でる。

「あさ」

すると彼女は安心したように鼻を鳴らした。耀はにやりと笑う。

「バカじゃないんですか。憎んでるくせに」

恐怖を感じていた。憎まれごとでも言わなければ、この綺麗な女に本気で惚れてしまいそうで。そんな気持ちを押し殺しながら、耀は眠ったふりをする麻の髪を撫で続けるのだった。

「麻ちゃん、ちょっといい？　話があんの、あとで私の部屋に来て」

「はい、依子さん」

依子が、訝しげに自分を見ている。麻は、昨夜の耀や陽との出来事のせいで心臓がびくりと跳ねるような感覚を覚えた。いつもはニヤニヤとうれしそうな笑いを浮かべている依子だったが、今日の彼女にいつもの余裕は見えなかった。

「あの」

「ん？」

「いま、丁度仕事が終わりましたので。お話を、いま伺うことはできませんか」

麻に背中を向け、去りかけた依子を小さな声で呼んだ。相変わらず曲がった表情は変わっていない。大きな城の廊下では足音が響くため、麻は履いていたヒールの音を鳴らさぬよう、絨毯の上をそつと走り依子に駆け寄った。

「ん、いいよ。じゃ、おいで」

依子は再びくるりと踵を返し、事務所と部屋のある、社員専用の西棟へと歩き出した。麻たちが住むのは東棟なため、西棟へはエレベーターと廊下の両方を渡らなければならない。いそいそと依子のあとを歩きながら、麻はつつい汗ばむ手を握り締めた。

東棟では、余程のことがない限り、メイド課のものが呼びにくる。商品候補たちにとって社員から直接誘導されることは極めて少な

つたため、耀を含む世話係や数人のメイドたちが不思議そうに麻と依子を眺めながら通り過ぎていった。が、いつもは陽気な依子も、今日は堅い表情のまま、通り過ぎる者には一切興味を示さない。

『どうしたの？』

エレベーターへと繋がる広く長い廊下を歩いていると、麻の秘書課の友人である未波が口だけを動かし、麻に視線を投げた。麻は目だけを合わせ、わからない、と首を振った。だが、その動作に気づいた依子がギロリと睨みつけたため、未波は慌てて去った。やがて、エレベーターに乗り、中庭へと通ずる地下道を越えたあと、依子の事務室のドアが見えた。

「さ、入り」

ドア横でちょこんと立っていたメイドがドアを開け、依子が柔らかく入室を促す。麻は依子に軽く会釈をし、失礼します、と呟き入室した。

「そこ、座って。あ、琳ちゃん、オーナーが呼んでたし、あとで行ってきて」

琳とは、先ほどドアを開けていたメイドだ。そばかすだらけの顔をぱつと明るくさせ、軽い会釈をすると、彼女は静かに出て行った。良い引取りの話でも出たのだろうか。麻はそんなことを考えながら、震える膝を右手で軽く押さえ、指定された椅子に腰掛けた。

「さて、と、麻ちゃん。今日は怒る為に呼んだんと違うから」

依子は大きなソファに腰を掛け、表情を崩しながら言った。怒って

いるというよりも、どうやら何か心配事があるらしい。

「あのね。社長が気づいてんの、陽とあなたのこと」

社長とは百合のことである。

「陽さんと、私？」

「そう。社長、ああ見えて結構鋭いしね」

依子は深くため息を吐き、椅子から立ち上がり身を固くした麻に、近づいた。

「陽は麻ちゃんを気に入ってるし、無理にやめろとは言わんよ。けど、気をつけて、ね」

その言葉に、麻はうつむいた。自分を心配してくれている依子に、どうして、好きでやっているわけではない、などと言えようか。教育期間中の商品は、社員の私物も同然なのだ。社員である陽に、口答えや拒否などできるはずがない。麻は陽に対して特別な感情は抱いていなかったが、陽が麻を狂うほどに愛しているのは明確だ。麻がそんなことを考えているとは知らぬ依子は、俯いた麻に、さらなる言葉をかけた。

「麻ちゃんの家族のため、知り合いのため、それに麻ちゃん自身のためだからね」

麻はその台詞に、大きな疑問を覚えた。金だけのために自分を売った家族、利用した末に自分を見捨てた何人もの知人、そして、他人にされるがままになっていた自分自身。そんな者たちに、どんな価値があるというのだろう。麻は口惜しさと悲しさに歯を食いしば

りった。

「依子さん」

枯れた声で、麻が囁く。その目は今にも泣き出しそうなほど、赤く潤っていた。

「なに？」

依子の返事はそっけなかったが、その声はひどく優しく穏やかだった。その声のせいか、麻はぼろり、と涙を流した。依子には、その涙が本物なのか偽物なのかの区別がつかなかった。それほどに儂い色を見せていたのだ。

「どうして、なのでしょう。私は」

「……私に、そんなこと聞くの？」

依子は軽く苦笑いした。曲がりなりにも、依子は麻を売る立場なのだ。柔らかく麻の背中を撫で、依子は呟いた。

「分からへんけど、麻ちゃんには、なんかある。愛されすぎてんのかな」

「愛、され？」

「そ。愛されすぎて、その重みをどこに持っていけばいいのかわからん状態」

麻よりもさらに重いため息を吐き、依子は微笑んだ。私が言うのもおかしいかもしれんけど、と付け足し、依子は言った。

「ちょっと、休憩しよ。ね？ 愛はもらえる分だけでもらっとけばい

い
「

思いがけぬその言葉に、麻は脱力し、堪えていた涙を溢れさせた。

「ねえ、耀」

東棟の中のミーティングルームともいえる場所であるロビー。どこかのホテルのように飾り付けられたその大きな空間は、とても人身売買の商品が、格納、される場所には見えなかった。赤い絨毯に茶色いソファ、間接的な証明やガラスのテーブルがより一層、その部屋を豪華に見せている。麻は、その椅子のなかの一つに腰掛けていた耀の肩を叩いた。

「何ですか？」

「絵実ちゃんが亡くなったの？」

「知ってたんですか」

耀は苦笑いする。絵実が亡くなったという報せは、とうに商品たちの世話係である耀の耳に届いていたのだ。耀の立場は社員の次の次、といったところで、麻にとっては目上のはずだった。だが、耀もはじめは商品候補だった。それも、麻の後輩だ。そのため、麻は耀に難なく接することができていたのだ。苦そうな珈琲を啜る耀をちらりと横目で睨み、その隣に腰掛けた。

「随分と図々しい。晴海さんに知れたら不味いのでは」

晴海とは麻の教官だ。彼女は、商品たちが社員や世話係、教官などに深入りすることをひどく嫌っている。

「大丈夫、今日は社長に呼ばれてるって言うておいたから。それより、陽さんは？」

「嘘は得意なんですね。またあの男の話題ですか？」

「いいでしょ、今日は仕方がないんだから。で、どうなのよ？」

耀はため息を吐き、ソファに座ったまま、入り口のガラス戸の近くでうろついている細身の男を指差した。

「……あ」

耀が指差した男は、陽だったのだ。麻はぼかん、と口を開けたまま、ふらふらとさ迷うようにして歩いている陽を見つめた。

「社長に叱られてから、ずっとあの調子ですよ。馬鹿らしい……」

陽が絵実を絵画のモデルにしていたのは、誰もが知っていた‘秘密’だった。「此处だけの話」はどうやら確実に無限に広がっていくものらしい。麻や耀は、晴海の嫌味な「此处だけの話」に教えられたのだ。

「あんな男に一方的に愛される貴女も災難ですね」

「なんで知ってるのよ」

「言ってましたよ。『好きでやってたわけじゃない』って」
「あ」

耀に横腹を肘で突かれ、麻は抗議の声を上げた。陽は二人の姿にも気づかず、相変わらずふらふらと窓の外を眺めている。

「私が貴女だったらすぐにフリますけどね。絶対に私の方がいいと思いますけど」

耀がニヤリと笑う。

「何言つてんのよ、私たちは『お友達』でしょ」

「そうですね。貴女なんかを恋人にしたら人間が廃れますしね」

そつぽを向いた麻に、耀はさらに嫌味に微笑んだ。麻は陽にも、耀にも恋愛感情などなかったのだ。陽は単に社員であるから、そして、耀は飢えた欲を満たし合っただの「友達」だった。陽のことは分かるまいが、少なくとも、耀も麻に恋愛感情を持っていないはずだ。当初に、二人でどちらかが恋愛感情を持ってしまわぬように、と約束を取り決めたのだ。人身売買という自由のない世界のなかで、限りある快樂をお互いに得るためには仕方なかった。男と女で交わされ「友情」契約は、意外にも堅いものである。

「お互い楽しめばいいじゃないですか、貴女は容姿も反応も「お相手」としては申し分ない」

「そうね、耀も。陽さまには悪いけど、私にだって王子様はいる」

心から微笑む麻に、耀は僅かな戸惑いを覚えた。その笑顔の輝きは、紛れもなくどこかに住む麻の「王子さま」の記憶によるものだろう。彼はより一層、不気味な笑みを深くした。

「私が住んでた田舎町の話ね。17歳のときだったから……、もう8年前か」

「8年？ もう25ですか」

耀は道理で、などと呟きながら麻の下腹部を撫でた。少し柔らかくなっている。先日抱いた際に気づいたものだった。商品たちは体重や身長までもを厳重に管理されているため、麻は決して太ったわけではなかったが、妙に身体が柔らかくなったその理由に、耀は興味を抱いていたのだ。

「いいじゃない、ちよつとくらい太ったって。0・3キロだったから、許容範囲内でしょ？」

「……まあ」

その人によるが、基本、体重制限は当初から2キロ太ればアウトという仕組みになっている。

「まあ、それはいいとして、私が17歳のときね」

微笑を浮かべつつ、麻が話を始めた。

「17歳のとき通ってた学校の同級生で、物凄く絵の上手い子がいたの。男の子だけどね」

麻の表情は、常に緊張しながらも、奇妙な笑みを浮かべている。だが、今日のそれは違った。遥かに柔らかく、優しい表情だ。

「偶然、隣の席になったとき、彼が無理やり私の絵を描くつて言い出したの。私はそりゃあ反対したわよ。普通の絵ならまだしも、私をモデルに花魁を描くなんて言うんだもん」

今の仕事を聞けば納得するかもしれないけど、と麻は付け足し、耀に寄り添った。女性特有の体の柔らかさが、耀を上ずらせた。普段も甘ったるい彼の声は、さらに甘くなっていた。

「……それで？」

「なんだかんだ言つて、描いてもらったの。でも、完成品は見せてもらえなかったよ」

きつと、その絵が描かれている最中に、麻は再び売られたのだろう。薄い茶色の髪を揺らしながら、彼女はふわりと耀の腕のなかに、からかうように収まった。彼女にその気がないことを知っている耀もまた、からかうように彼女を抱きしめた。

「あー、もうこうやって抱きしめてくれるの耀だけかもしれない」

「陽は？」

「陽さまは、ね」

俯く麻は綺麗に微笑んでいたが、その表情に色はなかった。奇妙なほどに青白く、紅いところなどまるでない。唇さえも、白くなっ
てしまっていた。気づけば、麻は耀の腕のなかでがたと震えている。一際強く彼女を抱きしめ、なおもふらふらとしている陽を横目で見みながら耀は続きを促した。

「彼はもうきつと結婚してると思う。私はどうして、いつもこんなことになっちゃうんだろう」

麻を溺愛しているのは耀や陽ばかりでない。他の社員、教育係、教官、世話係においても、幾度無理やり抱かれたことか。何か特別なものが、麻にはあった。「愛されすぎて」いるのだ。その重みに耐えられるほど、麻は強くない。

「……好きだったの、その人が。私が人生で、最初で最後に好きになった人」

「最初で最後、ですか」

「そう。もう二度と、誰かに恋するなんてことはないと思う」

愛することはあってもね、と耀の耳元で麻は囁いた。友達として世話係として、男として。自分には何ができるのだろう。今にも溢れそうな麻の涙を見つめながら、耀は考えていた。窓の外はすっかり暗くなっている。まもなく夕食の時間がやって来るだろう。遅れることがあれば、麻にしても耀にしてもひどく叱られてしまう。だが、耀にはそのようなことなど何でもなかった。初めて、麻を「愛おいしい」と思ったのだ。恐らく、恋愛感情ではないそれは、親子や兄弟に対する愛と同類のものなのだろう。

「本当に、私のことを好きって思ってくれてる人、いるのかな」

「いるんじゃないですか」

こくり、と頷きながら陽を指差す。

「違うの。きっと陽様は私を見てない。私も陽様を見てない。もう怖いよ、どうしてそんなに私を苦しめるのかな」

麻は誰にともなく、嘆いた。幼少の頃から、数え切れないほどの男に愛され、抱かれ、想われ。売られたことで親族や友人までもを失いかけていた今、麻には信じられる者などいなかった。

「じゃあ、苦しめばいい。もっともっと。苦しんで苦しんで、魔よけでもすれば良いじゃないですか」

耀は大きく深い笑みを作り、麻の腰を掴み、抱きしめた。人が見ている。彼は麻の顔を隠すように包容し、彼女を自らの膝に座らせた。細い脚と、しっかりとした腰が絡む。そのまま、麻の柔らかな唇を貪った。麻はしきりにあつい、あついと呟いていたが、やがて耀の愛撫を受け入れた。髪を撫でる手がひどく心地よい。体を密着させたまま、耀の欲求に、麻は必死で応えた。

「まだ足りないでしょう？ これくらいのことはされ慣れてますよね」

耀の笑みは、まるで悪魔のようだった。ひどい恐怖を覚えながらも、ひしひしと心地よさが麻を蝕んでいった。首筋を撫でられ、何

か冷たいものが背筋を走る。軽く喉を反らした際、麻はあるものに気がついた。耀と麻の状況をしっかりと見ていた陽だ。冷めた目で二人を見据えていた陽はやがて麻の視線に気づくと、去っていた。

「あ、陽さんが」

「どうしました？」

「陽さんが……」

「それでいい」

耀はさつと麻から体を離した。どうやら、目的は陽に見せ付けることであつたらしい。麻は体の火照りを抑えきれぬまま、荒いため息を吐いた。そして耀が、そのため息に笑ったその時だった。麻は口内に異物感を感じたのだ。慌ててぺろりと舌で擦ってみると、それは何かしらの薬のようだった。

「ちょっと、何入れたの？」

「睡眠薬、とか言ったら怒るかな」

悪気もなく言つた耀に、信じられない、と麻は視線を向けた。耀はなおも笑っている。くらくらと眠りに堕ちていくような蕩けた感覚と戦いながら、麻は必死で声を上げた。ただでさえまずいことをしているのだ。内部告発でもあれば、麻どころか耀の立場までもがなくなるだろう。

「眠って忘れれば良いじゃないですか」

が、にやりと微笑んだ耀に抵抗することは無理に近い。麻はすっかりとあきらめ、耀の肩に身を預けた。

「そんな目で私を見るの、ねえ、陽？」

そう叫んだ金髪の女は、紛れもない美女だ。碧い目に金色の髪、ほどよくふつくと豊かな体。誰もが見とれるであろう彼女は確かに美しかったが、信じられないほどの汚い言葉で、彼女は陽を罵っていた。

「レーナ、頼む。早く出て行ってくれ」

「結婚してくれるはずじゃなかったの？　なあに、それとも好きな女でもできたというの？」

レーナというその女は、偉そうにどかりと室内のソファに腰掛けた。室内にあるなかでも最も上等のものであることを知っていながらの行為だ。二人が言い争っているこの大きな陽の事務室は、百合や依子のもと同様、とても大きく立派だ。何よりも画家として、大きな窓と多くの椅子、そして数知れぬほどに並べられた本や絵画は、彼にとって命の次に大切なものだった。だが、レーナはそれを踏みにじり、数時間前に完成したばかりだった麻の肖像をピンヒールで踏んだ。

「これがその女？　ずいぶん綺麗じゃない？」

「ああ」

反抗はせず、ただ頷く。それは陽の本当の気持ちでもあった。レーナは確かに、美しく華麗だ。だが、麻についてはただ「綺麗」としか表現の仕方がなかった。とにかく「綺麗」なのだ。それが痛いほどに伝わるその肖像は、陽を愛しているレーナにとってひどく辛

いものであった。

「私は、スカーレットなの。あなたはアシュレ。だから、私を愛して頂戴、ねえ？」

切実な瞳で、レーナはそう言い切った。だが、小説のなかでは、アシュレはメラニーという女と結婚してしまうではないか。陽は不快感を覚えながら、こつも面倒なことになってしまった原因を脳裏で探っていた。

レーナは陽の幼馴染で、幼稚園から大学まで、ずっと同じ学園に通っていた。現在勤めている会社さえも同じだ。陽が美術を専攻したときも、彼が金のためだけに人身売買を商売とする会社への入社を決意したときも、レーナは常に傍にいた。陽の亡き両親は、ヨーロッパの出身である両親を持つレーナをひどく好んでいたが、必要以上に美しく、また、必要以上に媚びるレーナは陽にとつて邪魔な存在でしかなかった。レーナが陽に好意を寄せていたという事実も、その原因の一つだ。麻を本格的に想っていたことに気づき、きつぱりと別れを伝えようとしたとき、レーナは何かを敏感に感じ取った。陽が一言も言い終えぬうちに、レーナが先に口を開いたのだ。

「レーナ、僕はアシュレなんかじゃない。僕は、ナルチスなんだ。君は、ゴルトムントだ」

「ゴルトムントですって？ 私は流浪人ではないし、芸術家でもないわ。冗談じゃない」

愛欲に溺れ、そのせいでやがてペストで愛人を失い、結局は少年時代に通っていた修道院へ戻り芸術家として生きた男、ゴルトムント。レーナと彼に、陽は何かしらの共通した部分があると信じていた。愛に溺れたが故に、堕ちていく愚かな人間。まさにそのとおり

ではないか。そのくせゴルトムント、そしてレーナは常に死を恐れ、世の中を腐ったものと考えていた。食用として殺された魚は、一見銀色に光り美しいが、よくよく見ればその目はひどく濁り、澄んだ水のなかで輝いていたはずの尾や鱗ずいぶんとは色あせている。そんなゴルトムントの思想と似たようなことを、いつかのレーナは話していた。

「いや、君は間違いなくゴルトムントだ」

「私を愚かだつて言うの？　ねえ、言いなさいよ、私を愛しているつて。そうでしょう、愛しているでしょう？」

レーナは両手を握り締め、陽に詰め寄る。傾きかけた夕日が彼女の金色の髪にあたり、それは息を呑むほどに美しい光景だった。だが、陽はそれに見蕩れているほどの余裕はなかった。先ほど見た様子が、ひどく残酷に目に焼きついていてのだ。自分以上に美しい姿をした男に抱すくめられ、彼と激しく愛し合っていた麻。愛おしい自分だけのものではあった宝が、どこかの海賊船に連れて行かれてしまったような気分だ。実際、彼の顔はひどく青ざめ、手足はぶるぶると震えている。華奢な唇で紡ぐ途切れ途切れの言葉も、掠れたようになつていた。レーナは、彼の様子からして気配が普通でないことを感じ取っていたのだった。

「でも、君には夫がいる。僕は君を愛したことなど一度もない」

「嘘でしょう？　それに、あのひとは私に冷たい。私を心から想ってくれているのはあなただけなのよ」

「僕は君を愛してなんかいない！」

大きな声でそう叫び、陽は両手で頭を抱えたまま、座り込んだ。麻の顔、レーナの怒号、百合の煙草の香り、依子の声、そして麻を抱いていたあの男のひどく歪んだ笑い顔。それらがぐるぐると陽の

脳内を、まるでドーナツ型に形成された河のようにぐるぐると回っていた。

「一人に、して」

それだけ呟くと、レーナは既にこれ以上を議論する気をなくしていたらしく、さっさと部屋を出て行った。彼女の香水の残り香を感じながら、陽は考えた。麻の香りのほうが遥かに心地よい。本来ならば‘商品’には香料など、与えられることはない。だが、いつも麻の傍につき、何かにつけてがみがみと文句を言っている初老の女はひどく厚化粧でなければいい女だ。その女の隣でいつもせつせと働いているからこそ、ほんのりと具合の良い程度に女の香水が麻にもうつるのだろう。その偶然さえもが、陽にとっては嬉しく、また神が麻と自分自身に与えた奇蹟にも思えた。

一体、自分はどれほどあの小柄で細身のどうということのない女を愛せば済むのだろうか。それは、やはり陽は芸術を愛しているということも明確に表していた。何故ならば、麻の姿はまるで一つの芸術品のようであつたからだ。しなやかな仕草と柔らかく体温を含む中性的な声は、人間ではない何者か、又は快樂ともいえる感覚が彼女に与えたものだろう。胸に激しすぎるほどの動悸を感じ、陽は寝台に身を思い切り投げたのだった。

「あら、メイドさん？ 可愛い」

麻が城の玄関前で掃き掃除をしていると、怖ろしいほどに美しい女が彼女に近づいた。麻は呆れたようにその姿を見、ぺこりと会釈した。身なりからして、相当な身分の持ち主なのだろう。ふわふわと背中に流れる髪は童話の姫の如く金色に光り、輝くような空色のスリッパドレスが彼女に良く似合っている。本当に人形のようなうだと麻は自らの真っ白で飾り気のない地味なワンピースを思わず見下ろした。

「ようこそいらっしゃいました。どうかお氣をつけてお帰りくださいませ」

城にやってきたすべての客に言わねばならない、重要な台詞だ。この社にいくと、まず教育は徹底的にこの文句や礼儀作法を叩き込まれる。この女は女優か何かだろうか、という好奇心は胸のうちに秘め、再度深く頭を下げた。だが、麻を見下ろすその視線はひどく鋭い。そのことに瞬時にして氣がついた麻は、ゆっくりと顔を上げた。見てみれば、その女は突き刺すように自分を睨んでいるではないか。その視線は明らかに憎悪の対象となるものに向ける類のものだった。また何かやらかしてしまったのだろうか。麻は相手に聞かぬように、小さなため息を吐いた。

「……あなた、名前は？」

女の日本語には微かな仏語の訛りがあることに氣がついた麻は、女と同じく目を光らせ、きっぱりと戸惑うことなく言い放った。

「宮村麻と申します」

「ミヤムラ、アサね」

女は自らの名前は出さずに、麻の言葉を聞き、小さく頷いた。傲慢で自己中心的な性格は金持ちの令嬢によくあることで、ここにくる客はみなほとんどそのようだ。しかし、この女には何かもっと特別なものがあつた。私はただの馬鹿ではない、とその真摯な表情と鋭い視線が語っているのだ。どうやら女は麻の威嚇するような表情にも気がついたらしく、明らかに作り笑いと分かる笑顔を作つた。

「私はレーナ・マローネ。ねえ、アサ、お茶でもいかが？ お仕事を邪魔しては悪いかしら」

やはり、この女はフランス人らしい。苗字とアクセントからはつと気がついた麻は、目下の者としての礼儀は忘れず、どうもと頭を下げた。レーナは気にしないで、という風に首を横に振つたが、手を差し出すと同時に彼女の鼻がぴくりと麻をあざ笑うように動いたのを、麻は見逃さなかつた。それに、邪魔しては悪いなどと謙遜しておきながらも、麻に拒否権は与えていない。やはり性格は相当曲がつているようだ。女王のような美しさを持つレーナに比べ、恐らく自分は子供のように幼稚で情けない表情をしているのだろう。古い幕を後ろ手に隠し、麻は意味もなくにこりと笑つた。そしてレーナがまた、あの挑戦的な微笑を返したのを確認すると、再び彼女を城内に招き入れた。

「ねえ、アサ。私は話をするとき、とても長くなるの。だから予め聞いわ、時間はどれ位ある？」

「お客様の長時間がなによりですので、私はいつまでも」

相変わらず、お互い敵を威嚇するような口調である。レーナはこの不思議な笑顔を持つ麻に、憎悪とともに多大な興味を抱いていた。陽にあれほどまでに見事な肖像を描かせるほどに彼を夢中にさせた女。その上、この城の世話係を幾人も落し、はたまた数え切れぬほどのその恋人たちを恨ませた女。自分と同じ程度に男を落す力のあつこの女は、レーナにとって何よりの暇つぶしで格好の鴨だった。

「フランス語はお話になつて？」

「ええ、少しなら」

麻は困惑しつつも質問に答える。正直なところ、フランス語はとても苦手なのである。だが、レーナの前で弱点を晒すのは何よりも嫌だった。対抗できるはずない相手に対抗しようとしている自分の心のどこかにいるのだ。その事実にもまた苛立ちを覚えながら、麻は乱暴にカップの珈琲を飲み干した。来客と‘商品’のペアにのみ使用が許されるこのティールウンジは、社員用のものには劣るが、それなりに豪華だ。桃色の絨毯や濃い色の木製のテーブルはなかなかの風情を生み出している。窓から入る爽やかな夕暮れの風を浴び、少しの寒さを体感しながらも、麻はレーナという威圧的な話し相手との会話を半ば楽しんでいた。

「あなたは何だか、他のおばかさん達よりも話が分かりそうね。早速本題に入ってもいいかしら」

「恐縮です。どうぞ」

麻はレーナの言葉を促す。レーナは暫くの間、せかせかと働くメイドたちに視線を向けていたが、やがて、麻の方へ向き直った。整った綺麗な顔立ちだが、意地悪そうに曲がった唇が妙に目立つ。そんなレーナの顔を眺めながら、麻は少し首を斜めに傾げた。そうした方が、上手く笑顔が作れるのだ。長年の経験と失敗から生んだ技だった。レーナも同じような技術を心得ているらしく、彼女もまた、肩を少し竦めたまま笑った。

「では、いきなりで悪いのだけれどもね。陽をこれ以上、いじめるのはやめて欲しいの」

「はあ……。私が陽さんをいじめたと仰るのですか」

堂々と言い放ったレーナの視線は先ほどの半ば控えめなものとは違い、今度は明らかに麻を睨んだ。予想に反するほどの強く鋭い視線に麻は一瞬怯んだが、ぼそりと声を漏らした。詳細を聞くまで、自ら何かを話す気はない。レーナの表情はこれ以上直視せず、麻は掃除をし終えることのできなかった玄関をレーナの肩越しに眺めた。苦労して集めた木の葉が風のせいで散り、数時間もかかったものが台無しだ。大きなため息を吐いた麻が話をまじめに聞いていないことに気が付いたのか、レーナは再びにつこりと笑った。そして、周囲にも聞こえるような大きな声で言った。

「いい？ とにかく私の陽をいじめないで。どうせ社員の一人に付けば売られないようにしてもらえるでしょう、ここは」

レーナはにやりと笑みを深くする。その様子に、麻もしっかりと玄関から目を離し、きつぱりと言った。

「いいえ」

「随分分かったような物言いじゃないの。申し訳ないけれど、私はこの会社のシステムについて十分理解しているつもりだわ」

意味がわからない、といった風に麻が軽く眉を顰めると、レーナは勝ち誇ったように笑った。なんとも微妙な表情だ。六歳か七歳の頃、大きなフランス人形を祖母に買い与えられたことがある。それはとても綺麗な浅葱色の目をしており、幼いながらひどくその人形の綺麗な容姿を羨んだものだ。着ている細やかな装飾のドレスを真似て、布団を「ドレス」などと言って被っては母や姉を困らせたこともあった。まだ、母が健康で宮村家は幸せだった頃の思い出だ。麻は微笑ましくも涙が滲みそうなほどに懐かしい思い出に身を預け、しばしの間、レーナの表情を眺めていた。しかし、レーナが露骨に不愉快そうな表情を見せると、麻はそつと話の続きを促した。

「どういう意味でしょうか？」

「遅れて申し訳なかったわ。私、この会社のフランス支社の支社長をやっているの」

嫌味な音は一切入れずに、にっこりと微笑む。麻にとって、それは皮肉以外の何者でもなかった。

「そうでしたか。それは失礼致しました」

それだけ言い、できるだけ深く頭を下げる。嫌な女だが、自分より遥かに上の人物だと分かればこうするほかない。麻の困惑に気づいてか、レーナはさつと麻の肩を摩った。驚いた麻は顔を上げたが、レーナはそれを気に留めず、改めて口を開いた。

「それで、元の話に戻るけれど、陽を弄ぶのはやめて。ああ見えて

弱いよ、彼は」

いかに自分が陽を大切にしているかを表すような口調だった。だが、麻は既に見抜いていた。恐らく、レーナは陽を溺愛ともいえるほどに深く一方的に愛しているのだろう。そう、まるで陽が麻を愛すように、レーナはきつと陽をひどく愛している。だが、陽に気が全くない麻にとって、それはとてつもなく面倒で迷惑な話だった。できるものなら愛されたくもない男の恋人に、なぜ自分が恨まれなければならぬのだろう。自らの不幸をひどく恨めしく思いながら、麻はレーナの話に聞き入った。

「それに……、陽は私のものよ。あなたには勿体無いもの、ねえ、そうでしょう？」

「はい、私もそう思います」

「あら、ずいぶんと謙虚じゃないの」

あなたが不遜過ぎるのでは、と漏らしそうになる口を押さえ、麻は莞爾として笑った。私は恋愛などしていない、という思いが伝わったのかもしれない。さも驚いたような調子でレーナが語った。

「もしかしたら、陽があなたを一方的に好いているだけかもしれないわね。でも、それはあなたにとっても彼にとっても不利益で不幸なことなの。分かる？ だから、もし誘われるようなことがあっても、彼のためにもきっぱりと断って頂戴」

「はい。承知しております」

まるで雑用をと言いつけられたときのようにシンプルに答えた麻だったが、レーナは満足したようだった。最後の仕上げとも言おうか、レーナは締めくくりであるとも言わんばかりに、派手な携帯電話の画面に浮かぶ写真を麻の目の前にかざした。その写真に写る

人物は五歳くらいの少女で、犬を抱きながら可愛らしく笑っている。レーナによく似た顔をしていたが、彼女のように意地悪な表情はしておらず、また、唇も「へ」の字に曲がっていなかった。子供特有の純粋で綺麗な面持ちをしている。社交辞令としてその娘が誰なのかを麻が聞こうと試みる前に、レーナが先に言った。

「この子はリリーというの。私の娘で、陽の娘よ」

「陽さんのお子さん？」

「そう」

麻は内心、少々驚いていたが、それは顔に出るほどの大きいものではなかった。陽のことだ、その程度の過去ならあるだろうとは以前から睨んでいたのだ。また、陽にその気がなく、寧ろ逆である麻は格別その事実を不快に思わなかった。美男美女の陽とレーナのこゝと、可愛い娘ができるのは当然だが羨ましい、程度にしか思っていないのだ。レーナはそれを少し不思議に思ったらしく、さっと携帯電話を仕舞った。

「分かったでしょう？ もう、陽には近づかないで頂戴」

「分かりました」

好きでやっているわけではありませんけどね。心の叫びが心臓の裏側を叩くように脳裏を突いたが、あえて口に出すことはしなかった。この女との余計な揉め事は、麻にとって、極力避けたいものであったのだ。

心臓を冷たい手で握りつぶされるような冷たく痛い戦いを麻とレーナが繰り広げている間、耀と陽もまた、それこそ血の滲むような口論に陥っていた。耀が麻に睡眠薬を飲用させたことに対して、陽はひどく腹を立てていたのだ。それまで、麻は陽に逆らったことなどなかった。社員と商品の関係なのだ、無理もない。だが、陽は熱情のあまり、その事実を無意識に見失っていた。そのため、行き過ぎた耀の行為に、陽はこの上ないほどの怒りを感じていたのだ。社員食堂で耀と顔を合わせたそのときの彼の態度に、陽の怒りは爆発したのだった。だが、レーナや麻のように人前でいがみ合うことはせず、陽はあえて自らの事務室という場所を選び、耀を呼んだ。耀はいつも通り、余裕のある微笑を浮かべ、現れた。耀と陽の立場はほとんど変わらず、百合が耀を相気に入っているため、耀は特別陽に媚びるようなことはしなかった。

「呼びました、陽？」

「はい、麻のことで話があるんですけど」

自分の対にある椅子に座るよう促し、陽は普段と変わらぬ口調で延々と事情を話し始めた。はじめは気だるそうに椅子に凭れ掛かっていた耀だったが、次第にさも興味深そうに身を乗り出し、陽を挑発するかのような相槌を打った。

「唐突で悪いんですけど、頼みますから、麻を乱暴に扱うのはやめて下さい。売り物なんだし、社長も目をかけているし、もっと大切に扱って下さい」

「それだけですか？ まったく、君という男も意気地なしだ」

「たとえば僕のどういふところが？」

「だから、麻が好きなんでしょう？　それならそうとさえいいのに」

耀はさざりと言いのけ、煙草に火をつけた。銘柄はかのゴールドンバットだ。味は甘さやまろやかさとは程遠く、思わず顔を顰めるような渋い苦さだったが、耀はその香りが好きだった。甘ったるく緩んでしまいそうな心や体を引き締めてくれるような気がしていたのだ。そのきつい芳香に、一瞬陽は怯んだようだったが、迷わず話を続けた。どうやら彼は煙草を吸わない性分らしい。

「僕が麻を愛していると？」

「そこまでは言ってませんよ。愛なんてしても仕方がない。けれど、君は麻に多少の好意は抱いているわけでしょう？」

耀は子供のように、嬉しそうに言い放った。揉めているなどという自覚はまったくなく、むしろ陽との会話を楽しんでいるようだ。

「それは、まあ、教育する側としての愛情は幾らかありますけど……。耀さんもそうでしょう？」

「ええ。柔らかいし可愛いし、悪くはないと思いますよ」

やけにニヤニヤと、楽しそうに耀は言う。こちらを馬鹿にするような態度に、陽は舌打ちのひとつでもしたいような気分になっていた。だが、口でこの男に勝てるはずがない。

「まじめに聞いて下さいよ。こっちは真剣なんですから」

「大真面目ですよ。それとも何か？」

「……もついいです。とにかく麻に乱暴しないで下さい」

実に嫌な男である。できることなら腹を蹴飛ばしてやりたかったが、そういうわけにもいかないのが現実というものだ。自分が麻を「愛して」いるのは明確だったが、それを認めたくはなかった。芸術家として、社の人間として、男として、陽には並ならぬ高いプライドがあつたのだ。耀はそれをも含むすべてを見抜いていたように、相変わらず気味悪くニヤニヤと笑んだまま、それ以上は何も言わなかった。

「抱けばいいじゃないですか？」
「は？」

唐突に自信ありげな表情で言った耀に、陽は信じられない、といった風に眉を顰めた。

「女なんて抱けば落ちますよ？ あ、もう知ってますよね」
「もう、いいですって。別に麻がどうかじゃありませんから」
「本当に素直じゃありませんね。麻が落ちないわけだ」

そう言い、笑いながら部屋を出て行った耀にひどく苛立ち、陽は乱暴にドアを閉めた。重い木製の扉は、それだけで建物中に響くような音を立てた。自分自身の失態を恥じながらも、陽は内心、妙な感情を抱いていた。

果たして自分は本当に麻が好きなのだろうか。愛くるしい笑顔とこの上なく綺麗に輝く瞳は大好きだ。だが、何かが違う。耀と話しはじめて気が付いたのだ。自分は恐らく麻に依存している。麻以外のことには、何の関心も持てないような身の上だ。明らかに依存している。どうしてこれまで気が付かなかったのだろうか、と彼はひどく悔いた。ここまで彼女に深入りしてしまったとなれば、きっと彼女を手放すことはできなくなるだろう。そう、まるで薬品や煙草

のように、麻の姿は陽の心を驚掴みにし離さない。考えてみれば麻のことを考えない日は一日もなく、目を閉じればいつも彼女を思い出していた。自分は一体どうしてしまったのだろう。本心はどこまで麻を「愛して」いるのだろう。理性と愛欲の間で、陽の心はひどく葛藤していた。

外はまだ明るく、数羽のカラスが窓越しに自分を覗き込んでいる。恐れさえあたえるほどに澄んでいる空は、彼をすぎすぎと痛めつけた。雲ひとつない青空に、陽は拳を振り上げた。木漏れ日が心地よい。春はやってくるようだ、春だけは。

「一体、何をやっているんだか……」

陽の部屋から帰ったあと、耀は自室のソファに腰掛け、尚も煙草を楽しんでいた。だが、いつもは感銘さえ受けるその味を、心の芯から楽しむほどの余裕は彼になかった。自分の話を聞いていた陽の表情と、自分のすぐ側のベッドで寝ている麻が気にかかって仕方がなかったのだ。開け放した窓から入る風は冷たく、コップに注がれたミネラルウォーターのなかに月光が反射していた。今夜は満月だ。

陽は間違いなく麻に想いを寄せている。誰から見てもそれは明確だ。だが、それにも構わず、自分は麻に身体的な愛だけを注ぎ、腕のなかで拘束し続ける。もしかすれば、麻を本気で愛しさえしているのかもしれない。だが、その真意は自分にさえ分からなかった。自分が麻のような女を、本気で愛するはずがないではないか。麻のような地味な女ではなく、もっと美しく華麗なものを求めているはずだった。いつの間に、自分はただの欲望の処理人形に恋をしたというのだろうか。やりきれない口惜しさが心のどこに残った。麻と出会ったとき、自分自身との契約を築いたのだ。決して心からは愛さぬこと、やるべきことはきちんとやること。今では、そのどちらも守ることができていない。愛してはならないものを愛してしまっただ。いや、愛したくないものを愛してしまっただといった方が妥当であろう。とにかく、自分自身の麻への感情に対して、耀はひどい罪悪感を抱いていた。

「麻……」

月夜につぶやいてみたはものの、何かが変わることはなかった。

あたたかい。

今のこの素朴でほんわかとした気持ちを表すならば、この言葉が適当だろう。とにかく、麻は何か柔らかいものに包まれていた。それも、ひどく心地よい。半ば快楽に近いものを感じながら、麻は目を開いた。艶やかな月光が目を刺激する。

「おはよう、麻」

聞きなれた声に、麻は寝転んだままとりあえず辺りをきよろきよと見回した。どうやら、此处は自分の寮であるらしい。粘着質なそれでいてしっとりとした軟らかい声だ。そうだ、この声はあの人のものだ。胸を締め付けられるような急な刺激に襲われ、麻は躊躇することなくその声を発した男に抱きついた。ふわりと髪を撫でられる。

「あつたかい。あつたかいね」

くるくると表情を変え、無邪気にも耀の胸に顔を埋める。その声色は、芯から嬉しそうだ。耀は彼女の華奢な体を愛おしそうに抱きしめ、細い首筋にそつと手を添えた。眠気のせいか、潤んだ瞳が心地よさそうにこちらを見上げる。苦しいほどにきつく背中にまわされたか細い手首は、今にも折れそうだった。やがて、耀はそつと麻の体を自らから離し、その目を見つめた。ぱちぱちとせわしく瞬きしながら、見開いたままで耀を見つめる二つの目は言うまでもなく綺麗な茶色をしている。

「耀？」

「おはよう、麻」

「あ、ごめんなさい、私……」

自分の置かれている状況に気が付いたのか、麻は、まるで背中に火をつけられた狸のような勢いで飛び上がった。だが、耀はそんな麻を再び抱きしめ、大丈夫だと伝えた。何せ、まだ夜中の1時なのだ。焦ることはない。

「心配は無用です。私の方で調整してありますから」

「ごめんなさい、本当に。部屋まで来てくれたの？」

私が襲ったからこうなっただですよ、と耀は笑みをこぼしながら言う。そのしぐさに、麻はぽつと頬を赤らめた。昨夜の記憶が蘇る。どうやら陽と口論をしたらしい耀が、物憂げな表情を浮かべたまま、部屋に入ってきたのだ、受け入れるしかなかった。そしてそのまま、眠ってしまったらしい。自らの大人気なさに、麻は恥じらいながらも毛布を被ったまま、起き上がった。

「麻ちゃん？ 目が赤いですよ」

「や……だ、ちょっと色々思い出しちゃって」

麻は眠気の覚めないまま、うるうると丸い目を擦った。ぽつり、ぽつりと細かな滴が手に落ちる。

「何かあるんなら、別に泣いても。私しかいませんしね」

嫌味なほどに、につこりと耀は笑う。

「やだ。泣かない」

「意地なんて張ってどうするんです」

そう言い、ひどく優しい手つきで、耀は再び麻をふわりと抱きしめた。その行為が効いたのか、まるで何かの糸がぷつんと切れてしまったかのように、麻は急に嗚咽し始めた。あ、自分はそれほどに痛々しい顔をしていたのか。それほどに可哀想なやつだと思われていたのか。耀の悲しそうな顔の歪みを見かね、麻は急に、哀しみが倍增したような不安に襲われた。

生ぬるい少量の液体が耀の首を濡らす。そのすべてを受け止められるように、と、麻の頭を丸ごと包み込み、耀はその髪をそつと撫でた。麻は彼に身を任せたまま、ぐすぐすと涙を流した。悔しさ、悲しさ、怒り、今まで背負ってきた疲労と苦しみ。そのすべてを涙で洗い流すかのように、麻は泣いた。あるだけの声と体力を使い、とにかく涙として外へ流す。その行為は、快楽に近い快感を心に招いた。

「……………ん、ありがとう。もう大丈夫」
「そう」

一言だけ言う。それを確認した麻は微笑み、シャワーを浴びるからとシーツを細い体に巻きつけそそくさと部屋を出て行った。取り残された耀はベッドに体を預けたまま、深く考え込んでいた。

麻は自分を見てなどいない。恐らく、陽でも耀でもない誰かを心の底から深く愛しているのだろう。だが、その‘誰か’は二度と会えない‘誰か’なのだ。麻も薄々諦めがついてきているに違いない。耀は何故かしら大きな怒りを抱いていた。それが嫉妬心だったとは

知るよしもなく、彼は苛立ちと不安をぐるぐるとめぐらせたままだった。麻は一体、あの儚げな瞳で何を見ているというのだろうか。あの娘は実は快樂など求めていないのではないのだろうか。快樂ではなく、自らを守護してくれる愛が欲しいのかもしれない。果たして自分は彼女にどれだけの安心と愛情を注ぐことができるのだろうか。心から愛しているということを見ることができない身の上で、どうしてそんなことができようか。麻は半ば、自分たちに体を捧げてさえいる彼女だって望んで売られてきたわけではないはずなのだ。自分は黙って去るべきなのだろうか。否、それとも外側だけでも、彼女に想いを寄せてしまった者として彼女の寂しさを満たす役割を受け入れるべきなのか。どうしようもない悲しみと口惜しさが、体中からこみ上げるようだった。

「ダサいって思ってるでしょ、でも事実、これが」

さも面白おかしそうに、依子が微笑んだ。先程まではずいぶん真剣に悩んでいた耀だったが、午後3時のティータイムの時間ともなれば、ぐだぐだと言ってはいられなかった。このティータイムは社員会議の一種で、それこそ大きな議題は出したりしないが、上の社員も下の社員も会話を交わし、相手が何を考えているのかをうまく捉えるためのものなのだ。必然的に、毎日の出席は暗黙のルールとなっている。そのなかで、耀は偶然依子を見つけ、彼女と話していたのだ。普段は話が滑稽なのと立場からして依子は皆に引つ張りだこなのだが、今日はフランス支社長であるレーナ・ロマーネがやって来ているため、上層部の社員は彼女の相手で精一杯だったのだ。ぬるくなった紅茶を少し飲み込むと、耀は言った。

「ダサいとは思いませんけど。でも意外ですね」

「褒めてんのん、それー？」

「さあ。どうでしょう」

耀が可笑しそうに言い、そっぽを向く。その際見えた景色は、特別良くも悪くもなかった。やはり、一番窓の外が醜いのは秋の終わりから冬の初めにかけてであり、最も美しいのは爽やかな風が通る梅雨の明けた夏頃だろうか。とにかく、今は春がやってくる手前であるため、そう醜くもなかった。桜が咲けばもう少しぱっとするとだろう。いま見えるものは中途半端に咲き始めた梅の花と灰色の雲が浮かぶ青緑色の空だけなのだ。

「別に私がヤンキーと付き合ってたっていいじゃない。そんなに嫌

な過去なんかな」

「そうですね……、まあ、私は頭の悪い連中は嫌いですね。話のレベルがとてつもなく低い」

「きつついこと言うね」。私はいわゆる『不良』って結構好きなんだけどなあ」

上目遣いで珈琲を啜りながら呟く。依子は完全に学生時代に戻った気分だったのだ。

「よしてくださいよ、もう三十にもなつて」

「失礼ね、そんなこと言ったらあんただってもう35じゃない」

耀は年齢の話をひどく嫌っている。彼は不服そうに、紅茶のカップを覗き込んだ。底に残った黒い粒がゆらゆらと浮いている。

「私、学年……。ううん、学校一の不良と付き合ってた」

「へえ。そうなんですか」

なにかじとじとした雰囲気か二人を纏う。だが、依子や耀は気にせずにだらだらと会話を続けていた。依子の長い髪が風に揺れ、まるで逆上がりをしたかのように吹き上がった。にやにやと楽しそうに微笑む唇と目は、普段以上に耀との会話に魅力を感じているようだった。

「何、面白なさそうな顔して。本当よ？」

「知ってますよ」

大袈裟に溜息を吐き、肩を竦める。そんな耀の態度をみた依子は、ふんとも言わんばかりに立ち上がった。

「いい、もう。もっとちゃんと話聞いてくれる人に言うもん」
「はい、はい」

あわてて依子を再び椅子に座らせ、耀は仕方なしに彼女の話に耳を傾けた。

「ところで本当に貴女たちは『財閥』とか『×グループ』みたいな言葉好きですね。最近はメイド課の娘たちまでどこの財閥に買われた誰がどうのこうの、だなんてくだらない会話ばかりですよ」

「あら？ お金持ちに越したことはないじゃない」

依子の言葉に、耀は苦笑いした。

「まあ、そうですね。あのキラキラした目を見ればわかるですよ」

そう言い、顎で斜め前に座っている中年の男を示した。趣味の悪い金色の時計や高級品らしい紺色のスーツが、その欲深さを語っている。彼は嫌味で下品な笑い声を立てながら、百合となにやら話していた。だが、その視線は百合の肩越しに、誰かを見ている。その誰かというのは、楠原朱実であることを耀は瞬時に察知した。百合のすぐ後ろに控えている彼女は、メイド課に属する優良商品で、その美しさは並大抵のものではない。さらさらと浮かぶ少し癖のある栗色の髪と大きな円らかな瞳は、中々見られない美貌である。その容姿は、麻を越えるほどのものだ。と耀は認めている。そのような女を、あの男は汚らしい目で凝視しているのだ。その想像が思いのほか不快で、耀は顔を歪めていた。その様子をみた依子はけらけらと女らしくなく笑いながら、目を細めた。

「耀くん、面白いわ。でも、私、ああいうの嫌いと違っよー？ ちょっとケチっぽいけどね」

クスクスと尚も笑いながら付け足す。過去の恋愛話は、依子にとつてすでに忘れられた話となっっているらしかつた。まったく気まぐれな同僚である。

「でも残念。朱実ちゃん、来年からの内定決まってんねんなー」

嬉しそうに笑いながら言う依子。こよなく他人の不幸を面白がるのが好きな彼女は、恐らく典型的な暇な30代女の姿そのものなのだろう。耀は少量の軽蔑をも含んだ眼差しで彼女を見つめながら、ふつと笑った。

「それはそれは。さぞかしラッキーな方でしょう？」

「もっちゃん。オーナーの知り合いの富豪やねんて。確か石油王とか言ってた気がするわ」

「なるほど。で、一体幾らぐらいで？」

どれほどの値段であの娘の身が売られたのか、という意味だ。

「んーとね、現在はン千万。本契約の開始まであと半年以上はあるから、億までいくのも時間の問題やろうけど」

「ほう……。生き甲斐つてもものも相当でしょうね、体にそれだけの値打ちがつけば」

依子は頷いた。この社の商品たちは質も形も良い為、驚くほどに売れる。商品が商品だけに敬遠する者も多いかと思われがちであるが、意外とそうではないのである。社内では、商品たちにまるで貴族のように扱われている社員たちであったが、外に出てみれば価

値が高いのは商品の方だ。そのため、他社と比べ、商品たちはこのうえなく大切に扱われていた。

「そうよねー。私も時価一千万円の体と値札、欲しいわあ」

アハハと笑いながら、依子は豪快に珈琲を飲み干した。

彼女は小さな繊維会社の社長の娘だった。特に利益の大きい会社でもなかったため、一般サラリーマン家庭と家計は大して変わらなかったと記憶している。幼稚園、小中学校、とそれなりのレベルを持つ一貫校に通い、友人も多く、幸せに暮らしていた。容姿も頭も決して悪くはない。京都生まれの純なお嬢さんとして彼女は、それなりに人生を楽しんでいた。

だが、その平和が皆無となって崩れたのは、中学三年生になる頃だった。その頃は中学校と同じ学園に所属する高等学校に通う予定だったため、受験勉強は必要なかった。簡単な進級試験だけで通れる程度であり、その試験に落第することなどまずなかったのだ。そんな思いで呑気に青春時代の真っ只中を過ごしていたところ、すべてが崩れてしまったのは、あの悪魔のような12月の日だった。雪が降り、ひどい寒さだったその日、両親は仕事の関係で北海道まで出掛けていた。依子はその日、友人とコンサートに出掛けていたのだ、両親に同行していなかったのだ。そのことは幸だったのか不幸だったのか、帰り際に依子の両親が乗っていた飛行機が天候のせいで墜落した。それも、青森と北海道を繋ぐ海の真ん中で、だ。何百人もの犠牲者を出した悲劇の事故だった。コンサートで大騒ぎしている最中にその報道があり、乗客の遺族だったことが判明した依子は、すぐに青森へと連れて行かれた。その後のことはよく分からない。あまりにも機械的に葬儀やその他の作業が済まされてしまったため、妙な空白が依子の心に残ったのだ。

「たつたのこれだけ……」

依子は両親の骨壺を手に抱いたとき、思わず呟いたものだ。あまりにも少なかったのだ、質量が。あれほどに大きかった生粋の京男だった父も、豪快な大阪弁で何もかもを笑い飛ばしていた母も、死んでしまえば15歳の依子の両手にすっぽりと収まる大きさなのである。驚きと悲しみが彼女を無表情に無情にさせたのか、それ以来、依子には人が寄り付かなくなった。

依子の明るく豪傑な性格は母親譲りだというが、恐らくそれを取り戻すのにはかなりの時間と苦労が掛かったのだろう。耀が同情さえ含む眼差しで依子を見つめると、依子はまた、イヒヒと笑った。

「でもな、あんたも家族は大切にせんと。いつ死んでまうんかなんて、分からないしね。私みたいな状況になる前に」

「分かってますよ。しかしね、私は相当家族に嫌われてますよ、特に妹夫婦にはろくに連絡もできない」

「何、男の癖に。言ってしまったたら楽なもんよ、『ちょっとは兄ちゃん大切にせんかい!』って」

依子は腹を抱えて笑った。いかにも自惚れに見える耀が肉親に嫌われているというのは意外な話だったのだ。

「ま、いいんですよ。妹は老いた両親の世話もしてくれてますしね」

「ええ? あんたの妹、長女でしょ? 当たり前よ、あ・た・り・ま・え。長女が老いた婆と爺の面倒見ないで誰が見るの」

耀は首を竦めた。どうやら、妹が両親の世話をしている以上、彼に発言権はないらしいのだ。大きな背中中に手を回し、依子は力を込

めて思い切り叩いた。静かな茶の間には似合わない、乾いた大きな音が響く。その場にいた客の半数以上が振り向き、痛がる耀を尻目に、依子は小さく舌を出して笑ったのだった。

妹とは十年前に大喧嘩をし、離れた。原因は些細なことだったが、お互い大きな憎悪を抱いてしまい、謝るに謝れぬまま家を出てきてしまった。考えてみれば、突発的で遊んでばかりだった自分や、自由すぎる両親の苦労や責任を背負ってくれたのは妹だった。今となれば、申し訳ない気持ちで一杯だった。だが、妹は兄が人身売買で商売をしているなどと聞けば、なおさら怒りだすことだろう。今更帰っても、どうにもならない。半ば絶望のような寂しさを抱きながら、耀は考え込んでいた。依子はトイレに立っている。自分は依子のように強くない、妹に文句を言う資格など到底ないだろう。

一体、私は何をしてきたのだろうか？ 妹を傷つけただけか、それとも両親に憎まれただけなのか。米国人である母親譲りの碧い目とオリーブ色の髪を含む綺麗な容姿が何だというのだろう。優れた頭脳と計算能力が何だというのだろう。それだけ妹は苦しんだのではなかったのか？ 結局は外見と中身の側面だけを利用した見掛け倒しではないか、自分は。家族や人間としてはこれっぽちも役に立っていない。一体自分は何の役目を果たしているのだろうか？

頭がひどく痛んだ。元々哲学的なことを考えるのは苦手だったのだ。頭のなかで情報や気持ちがあつちやになり、気持ち悪さを覚えたところで依子がトイレから戻った。

「ただいま。ずいぶん悩んでるね」

「……別に。大したことじゃありませんよ」

「あんたも素直じゃないねー。陽ちゃんに説教たれてる場合ー？」

依子にはやりと笑う。そばにいたメイドに紅茶を要求し、彼女はど

かりと座り込んだ。

「今日のアントはラスコーリニコフ。妹を犠牲にして一人で苦しんで。そんでねー、私はラズミールヒン」

「結構、結構。ラスコーリニコフは賢いんですよ、知りませんでした？」

主人公、ラスコーリニコフ。依子は彼が大好きなのだ。こちらの心が痛むほどの罪悪感を投げかけてくる。依子はこう見えて文学好きだ。両親が亡くなったのち、すっかり孤独になってしまい、読書以外にすることがなかったのだ。

「うん、私は……」

依子は何かを言いかけたとき、突然誰かが声を上げた。悲鳴などではない。依子は邪魔されたことに顔を顰めつつも、口を開いた女がレーナだということを知ると、くるりと振り向き彼女に注目した。

「みなさま、紹介が遅れました。娘のリリーです」

「まあ、社長。お嬢さまがいらしたの？」

レーナはいつの間にか、隣にリリーを連れていたのだ。桃色と白のドレスで着飾った少女は特に緊張している様子もなく、小さなクッキーを口に入れていた。母親の会社に連れてこられるのは慣れているのだろう。その様子を見て、百合が声を上げたのだった。もちろん、百合もレーナに娘がいることなどに知っている。だが、これも社交辞令だ。フランス支社は日本支社よりも遥かに売り上げが大きいのである。

「ええ。前夫との子ですの」

レーナがさりとて言い、にっこりと微笑むと、リリーも小さく笑顔を作った。やはり、こなれた仕草だ。なんと小生意気な子供なのだろう。確かに目鼻立ちは整っているが、母親に似て性格が大層悪そうだ。

「あれ、たぶん嘘。あの人の旦那見たことあるけど、あんな顔と違う。もつと生粋のヨーロッパっぽい顔だったわ。あの子、もしかしたら日本人とのハーフかも。相当血は薄いようだけど」

レーナや百合、他の客に聞こえぬよう、依子は耀に小さく囁いた。確かにそうなのである。リリーにはどこか日本人に似た顔立ちの面影があった。彼女の顔にふと見覚えがあることに気付いた耀は、はっと息を吐いた。

「似てますよ、あの娘」

「誰に？」

その答えをいうことはなかった。否、言いたくはなかった。依子は気が付いていないようだが、リリーという娘はあの男にそっくりだ。繊細そうで偏屈そうな細い眉と大きな瞳は、まるで陽そのものなのだ。

やはり、あの男には女がいたか。それも、このような高飛車で高慢な女だ。それでも陽は麻を墜とそうと必死なのである。やけに腹が立つ。自分だって、もしかすれば麻を愛しているのかもしれない。それは、耀だって友達として麻を抱くという卑怯な行為もしたが、それは麻の許可もあつてのことだ。ましてや、乱暴や他の女との関係を持ったりしていなければ、麻を心で束縛することもない。自分

はこれほどに努力し麻を愛そうと努めているのだ。いったいどうして麻は陽に従ったりするのだろうか？ その気になれば逆らうことだってできるはずではないか。耀はまたもや麻についての陽に対するひどい怒りを覚えながら、依子の耳元で囁いた。

「陽、ですよ。似てませんか？」

依子が驚いたように大きく息を呑んだのは、その数秒後もあのとこのであった。

「似てる、かも。そう言われればあの目と口、そっくり」

「でしょう？」

「うん。性格悪そうなんはたぶん母親譲りなんだろうけどね」

二人は声を潜めつつ、顔を見合わせて笑った。まったく、耀とは良い皮肉友達である。皮肉や嫌味を言いあうことをここまで楽しめる相手はそうそういないだろう。

「ん？ 待てよ、もしあれが陽ちゃんの子供なら」

「あ、そうですね。さっき前夫って言ってましたし」

「そういうことよね！ あれ、じゃあ麻は？」

はつと気が付いたように耀が手をぱんと叩くと、依子は背筋を伸ばした。ざわりとした悪寒が体を走る。あの男は、麻を弄んでいたのか。それに、いくら同僚とはいえ、他支社の上役と関係を持ってしまったのだ。それは、誰にとっても不利益なことではないだろうか。また、耀は恐らく麻を想っている。あの二人は、特殊な交友関係を結んでいることを気付かれないと思っっているらしいが、甘い。人身売買社会の情報ループがどれだけ速く細かいかを知らないのだろうか。依子はもう、麻と陽、そして耀の関係について熟知

していた。

（私って、結局何？ 麻ちゃんを守りたいのか、耀を助けたいのか、陽が憎いのか。それとも、自分の地位を上げたいだけなのか。私は結局、何がしたいんだろ）

「越えられない壁って感じね」

「何が？」

「ん、何でもない」

耀や依子たち社員が優雅な紅茶の時間を楽しんでいる間にも、商品候補たちは過酷な時間を過ごしていた。麻が廊下を歩いていると、ひどく大きな叫び声が聞こえたのだ。

「やだ……！ ちょっと、離してよ、ねえ！ 母さん、父さん！」

長い黒髪を振り乱し、半狂乱で叫ぶ女。細身のきつい吊り目をしたもう一人の女が、冷たい声で彼女を押さえつけた。たまたま通りがかった麻は気の毒に、と思わず立ち止まる。恐らく、新しく連れてこられた商品候補の一人だろう。麻は元から売られることに慣れていたし、そもそも諦めていたので抵抗はしなかったが、麻と違って暴れる者は多いようだ。

「うるさいわね。黙ってここに來なさいと言っているでしょう？」

「嫌よ！ それに、あなた誰なのよ！」

「木谷晴海よ。文句ある？ あ、麻、ちょっと手伝って」

晴海は麻の教官でもあった、初期教育係だ。厳しさと性格の冷たさで社内では有名なのである。しかし、麻は割りと彼女に気に入られていた。麻は慌てて近寄り、押さえつけられていた女を宥めた。

「えっと……、晴海さん、この子は」

「沖村伊里、今年で19歳。東棟の2009号室使用予定」

「東の2009ですか？ 私と同じ部屋ですね」

麻が呑気にも言うと、伊里はぴくりと顔を上げた。未だ警戒をしているらしい。麻たちと揃いの白いワンピースを着ながら、ぐすぐ

すと泣きじゃくっている。伊里の目も晴海の目も、この上ないほどに鋭かった。

「あの……、私が言うのもなんだけど、たぶん大丈夫だよ？」

晴海の見ているそばでは大層緊張するが、苦笑しながら言う。食事も美味しいし他の商品たちも優しいし、と付け足すと、伊里は尚さらひどく泣いた。

「麻ちゃん。他を探すのも面倒だから、指導先入人、麻ちゃんでもいい？」

伊里が泣いている間も、まったく気にすることなく晴海は続けた。指導先入人とは要するに先に入った商品たちが後輩の商品を教育する際の先輩代表ということで、通称姉妹システムと呼ばれているのだ。そんなに面倒くさい仕事ではなかったため、麻はあっさりと頷いた。

「そう。じゃあよろしくね」

そついいながら、晴海はひどく強く伊里の肩を叩いた。びっくり、と伊里が跳ね上がる。

「伊里、これからは麻の言うことをよく聞いて、毎朝8時には朝食と身支度を済ませて一斉研修に必ず出席すること。何かあれば救護班または教育班、管理班に連絡しなさい。いいわね？」

伊里は返事をしなかった。だが、晴海は気にすることなく、高いヒールを鳴らしながら去っていった。一人取り残された気分の麻はどう声をかければよいか、迷っていた。非常に微妙な立場なので

ある。

「伊里ちゃん、部屋、行こ。シャワーも洗面所もベッドもあるから……」

「いや！ あつちに行つて、来ないで、来ないで！」

大きな叫び声を泣き声とともに上げる伊里を見ながら、麻は溜息を吐いた。これまで、自分のあとに売られてきた女は何人も見たが、ここまで強情な者はいなかった。自分が売られたときは抵抗しなかったため、麻はもどかささえ感じていた。

（どうしてこんなに騒ぐんだろう？ どうせあとから他所へ売られちゃうし、売ったのは両親なんだからいくら叫んでも助けに来てくれるわけがないし。ただでさえ研修と掃除が大変なんだから、泣いてちや生活できるほどの体力なんて残るわけがないのに……）

冷酷な考えが浮かび、慌てて揉み消した。まだ叫べるほどに愛した家族がいるだけ幸せではないか。この会社は人身売買における商品となる人材を集める際、拉致や誘拐は絶対にしない。進んで女を売る地方だけから連れてくるのである。それも、厳選された容姿の美しい者のみだ。それが高級富豪クラスのクオリティなのである。大体の場合、人身売買といえばアジアで6〜7万円程度の価値で売られることが多いが、ここは違う。一人当たりに一億ほどの値段がつく場合が多いのである。なぜなら、その分教育や立ち振る舞い、容姿などが完璧に磨き上げられているためだ。

「みんな最低なのよ、最悪！ どうして私が売られなくちゃいけないのよ！ あなたなんかにはわからないでしょ、そんな綺麗な可愛い顔して！ 母さんも死んで継母には嫌われて父さんまで継母の言いなりになるなんて……！」

伊里はわあわあと喚いていたが、麻は言葉を発しなかった。どうしようもなかったのである。

「伊里ちゃん、逃げたいんなら逃げればいいよ。でもさ、今はここにいられないよ。だからとりあえず部屋へ行こう」

麻は突然、ぼつりと呟いた。自分でも驚くほどの温かみのない言葉である。優しさの欠片もなければ、憎しみや怒りさえも含まれていなかった。それは、広い廊下の遠く向こうに社員たちの姿を目にしたからである。いくら商品といえど、こんな姿を社員ばかりか他支社からやってきた客にまで見せるのは不愉快だ。

「今日は大切なお客様もいらしてるの。部屋にはマナちゃんっていう子もいるから、大丈夫。早く行こう?」

麻が言うと、伊里は社員たちを眺めた。麻たちの白いワンピースに比べ、ずいぶんと派手な装いである。特に、真ん前を歩いている日本人と白人の女二人はこのうえなくけばしい。日本人のほうは真っ赤な口紅を塗った唇で煙草をくわえているが、もう一方の女のほうは人形のような少女の手を引いているため、まだましだ。あの小さな少女も、もしかすると自分と同じ売られた身なのだろうか。伊里は泣くことを忘れ、その娘に見入った。

「あの」

「どしたの?」

はじめてまともな声を発した伊里に、麻が片方の眉を上げる。

「あの、ちっちゃな女の子……。私を見てる。あの子も……?」

「うっん、違う。あの子は……」

麻は躊躇しながらも、相変わらず見つめあったままの少女と伊里を見比べた。少女は伊里が考えているのであるうっほど、彼女にとって都合の良い立場ではない。

「フランス支社長のお嬢さまのリリーさん」

いくら年下といえど、商品にとって社長令嬢は目上なのである。

「そう、ですか」

ぱつとリリーから視線を離し、伊里はやっと立ち上がった。

「すみませんでした。部屋まで連れて行ってもらえますか」

「あ、うん。エレベーターはこっち」

麻はきょとんとしながら、伊里の手を引いた。

「あ、麻さん、お帰りなさい。……あれ、新入りさん？」

「ただいまー、マナちゃん。こちら伊里ちゃん、19歳」

10畳ほどの三人寮に着くと、麻はぽすつとベッドに倒れこみ、うつむいたままもごもごと話した。伊里はうつむきながら、大きな荷物袋を片手に、入り口で突っ立っている。彼女が頭を下げたときの風で、玄関に置かれた植物がふわりと揺れた。

飯田まなみは紅茶のマグを片手に、その姿をまじまじと見つめた。麻ほどに細くはないが、体型は悪くない。身長は155センチといったところだろう。かなりの小柄な19歳である。

可愛いけど、なんだか人形みたい。しかも麻さんみたいに体が弱そうだし。あたしは大柄だし健康だからいいけど、この子は大丈夫なのかなあ。顔は中の上くらいかな。さまざまな憶測をしているうちに、麻が再び口を開いた。

「伊里ちゃん、この子はマナちゃん。優しいから心配しなくてもいいよー、お茶はポットがあるから自由に入れて。ベッドは一番奥の窓際で、ワードローブもベッドの横にあるから」

よほど疲れているのか、ベッドにうつ伏せたままだ。ワードローブに近づく際、背中が大きく開いた制服のワンピースから、とても綺麗な背中が見えた。少し骨ばっているが、滑らかで柔らかそうな肌である。伊里は少し恐縮しながらも、さらに近づいた。すると、首筋の内側に、赤い痣が見えた。その痣があらわしている事は明確だ。だが、まなみの首筋にそんなものはなかった。やはり麻の外見上での影響は大きいのだろうか。

「見て驚くよー、その中身」

綺麗な四肢を半分晒したまま眠り始めてしまった麻からいったん離れ、ワードローブの扉に手をかけると、まなみがクスクスと笑った。もしかするとああいうものが入っているのだろうか、と伊里はつい、考えた。B級の官能小説などで聞く、メイドにつきものの縛り縄や手枷を無性に思い出してしまうのだ。ここは高級なところであるため、やはり生々しい制服や場所などはないが、麻の体をみていればごく一部でもそういう部分があるのは明確だ。

「わっ、何これ……」

幸い伊里の予想は外れていたものの、中身は想像の範囲を超えていた。数時間前に自分が着せられた白いワンピースとまったく同じものが、30枚近くハンガーでぶら下がっているのである。その下の小物入れには指定の髪留めやネームプレートなどが丁寧にも入っている。

（一体何に使うのかしら、そんなに汚れるの？ それにしても、綺麗な生地……）

自分の置かれている状況を忘れ、伊里はワンピースのなかから一枚を手にとった。ワンピースは、贅沢にも絹でできていた。柔らかいそれは、幼き頃に亡くした母を思い起こさせる。母はいつも絹のストールを纏っては「いおちゃん、いおちゃん」と可愛がってくれたものだ。今では伊里のことを「いおちゃん」という愛称で呼ぶ者もなく、温かく柔らかかった母も亡くなった。いるのは冷たい心の継母と、娘の気持ちなど考えずに後妻の言いなりになっている貧乏親父の父親だけだ。その事実が、無性に悲しみを呼び戻した。ワンピースを胸に抱き、しゃがみこんだ。心が痛い。麻やまなみの前

であるにも関わらず、伊里は再び嗚咽し始めた。

かあさん、かあさん、かあさん。優しい声で名前を呼んでよ、そっと包んでないで姿を見せてよ、わたしを家に帰してよ、「私の可愛い伊里」って言うてよ、ねえ、母さん……。涙がどうしようもなく溢れた。辛いでも悲しいでも苦しいでもなく、ただ心が痛い。一体、母以外の誰がわたしを愛してくれたことがあっただろうか。あんなにも温かい腕で包まれたことがあっただろうか。あれほどまでに大切にしてくれた人はいただろうか。

「あの、伊里ちゃん……？」

伊里の嗚咽を聞き、跳ね起きた麻がそつと聞く。だが、伊里は返答しなかった。きつと、麻は大勢の男に愛されてきたことだろう。そんな者にあたしの何がわかるというのだ。誰からも愛されず、一人寂しく生きてきたわたしの気持ちが誰にわかるというのだろう。

（父さんや家から引き離され、連れて行かれる場所を継母から聞かされたあの時のわたしは安堵していた。たぶん、人身売買の会社なら、わたしのよう孤独な人が多いと思ったからなんだ。でも、違った。ここは身分と外見勝負。麻さんはわたしとは違う、きつと誰かに愛されてる。まなみさんだって、朝のあの女だって、あの小さな女の子だってきつと愛されてるのに）

「んー、伊里ちゃんまた泣いてるしー。あ、マナちゃん、その瓶まだ片付けないでよ」

「ちよつと麻さん、飲みすぎです。いい加減にしてくださいよ」

ちらりと麻とまなみの様子を涙目で伺ってみると、そこでは不思議な光景が繰り広げられていた。麻は自分のことを心配しているのかと思いきや、そうではなかった。先ほどの甘ったるい声は、恐らく

酔っているためだろう。改めて顔を見てみると、ほんのりと頬が赤く染まっている。酔っているその姿さえも色っぽく美しく、伊里はさらなる嫌悪に落ち込んだ。まなみと麻はそれでも気にせず、相変わらず酒の瓶の取り合いをしている。どうやら、麻は酒癖が悪いらしい。

「もう飲んじゃダメですって」

「いいじゃないー、別に。オーナーとか依子さまには呼ばれてないしー」

麻は酔っ払うと語尾が伸びるらしい。

「……と、いうことは陽さまにお呼ばれされてるんですね。あ、もう6時じゃないですか、お約束の時間なんじゃ……」

「ふーん、知らないもーん、あんな悪漢」

「麻さん！ 社員に聞かれてたらどうするんですか！」

ふーんだ、と麻は派手にフローリングに寝転がった。ベッドとベツドの間に挟まるようにして転がり、嬉しそうにきゃっきゃと笑い出す。

「あー……。ごめん、伊里ちゃん。手伝ってくれる？」

「へっ？」

どういう意味での「手伝う」なのだろうか。しかし聞くことはせず、伊里は赤く充血しているであろう目を軽く擦り、まなみの横に寄った。

「姉さ……ううん、このひと。酔っ払うとすぐに寝ちゃうの。今日は陽さんに呼ばれてるはずだから、着替えて行ってもらわなくちゃ」

まなみは呆れたように溜息を吐き、麻の体を揺さぶる。一向に起きそつな気配は無い。まなみは口を尖らせながら麻を抱き起こし、一番近くにあった自らのベッドに横たわらせた。それは人身売買社の寮で行われていることではなければ、ごく普通の上司と部下が繰り広げるような光景だろう。だが、伊里は泣きたいながらも不思議な姿を目にしていた。

（まなみさん、目が笑ってる。ばかにしてるんじゃない……、そう、微笑んです。呆れてるように見えるけど、この人本当は麻さんを微笑ましく思ってるんだ）

そんな考えが伊里の脳裏を過ぎった。その間にも、まなみは手を止めなかった。

「あの、すいません、陽さんって誰のことでしょうか？」

伊里が恐る恐る呟くと、まなみは彼女の方に振り返った。

「あー、言ってなかったんだ、麻さん。陽さんは社員の一人。絵がうまくて、あたしら商品候補に大人気」

「はあ……」

どうやらまなみはかなり大雑把で寛大な性格らしい。

「でね、麻さんがすごくその陽さんに気に入られててさ。この人、こう見えてもう25歳だから、自分でも分かっているはずなんだけどね。でも自覚してないみたい」

まなみはにこにこ微笑みながら、なおも言う。これではまるでまなみが麻の年上のようなようである。

「あーっ、もうこんな時間。ちょっと着替え、手伝ってくれない？ 初対面でこんなことさせるのも悪いんだけど……」

「だいじょぶ、です」

きつと目は赤く腫れている。だが、伊里は思わずまなみの言葉に頷いていた。

「ほいっと、あ、その引き出しから白いのを取って」

「うん、それ」

まなみは相当麻の扱いに慣れているらしく、するすると白いワンピースを眠ってしまった麻の体から剥がす。伊里は思わず目を逸らした。いくら女同士とはいえ、ごく普通にこのようなシーンを展開されては困惑するのも当然だろう。まなみは伊里が渡した白いブラウスを麻の肩にふわりとかけ、ボタンを留めはじめた。麻は相変わらずむにやむにやと寝言を呟いている。

「綺麗……」

伊里は思わず呟いた。どうして初対面の女の半裸を見ているのだろうかという疑問を抱きつつも、本当に麻の体は綺麗だった。細すぎるほどの腰はしなやかで美しかった。

「綺麗だよねー……」

まなみもほうつとした表情で答える。伊里がさりげなく彼女の手元を見ると、まなみの手先はまるで貴重な宝石か何かを扱うような丁

寧な動きで動いていた。

「と、いうか。このままの状態で出すのは無理かな……」

まなみははつと気が付いたように手を止めた。麻はふにやふにやと眠っている。このままで社員の前に出すのは失礼極まりない行為となるだろう。しかし、あの陽や耀のことである。気になど留めぬ、寧ろ喜びそうな気もする。が、ともかく内線で晴海に電話をかけた。

「もし、もし。すみません晴海さん、東棟2009号室の飯田です。同室の宮村麻が条芝さんに呼ばれてたみたいなんですけれど、本人が体調を崩してしまっていて、伺うのは無理だそうで……」

条芝とは、陽のことである。社内で商品が社員を呼ぶ場合、正式には苗字で呼ぶ方が正しいためだ。

『あら？ 麻ちゃん、さつき見たときは元氣そうだったけれど？』

「あ、その……急に胃の調子が悪くなっただけで」

電話越しに、晴海は怪訝そうな声を出す。まさか、酔っ払っているからなどとは言えない。とっさに出任せを口にした。

『あ、そうなの』

「はい。それで、条芝さんにご連絡して頂きたいのですが」

『分かったわ。あら、もうこんな時間。伝えておくわね。どうもご苦勞様』

「いえ、すみませんでした」

『あなたが謝らなくてもいいわよ。麻ちゃんはあとでたんまり叱っておくから』

晴海の冷徹な笑みが脳裏にくつきりと浮かぶ。心のなかで溜息を吐き、麻を哀れに思いながらまなみは電話を切った。おろおろと今にも泣き出しそうな伊里を尻目に、まなみは麻に布団を被せた。明日は長くなりそうだ。

「お母さま、お父さまはお見えにならないのですか？」

娘の言葉に、レーナはほうと溜息を吐いた。母親の重苦しい態度にリリーは一瞬怯んだが、腰掛けた椅子から離れようとはしなかった。大きく円らな瞳、細い鼻筋、そして煌く金髪などは母親譲りだが、その度胸もどうやら母親からの遺伝であるようだ。

「こちらへいらっしやい、リリー」

「はい」

座っていたソファで手招きをし、リリーを隣に座らせると、レーナはその髪を母親らしく優しく撫でた。

（この子の実の父親は誰であろうと、この子が私の娘であることに変わりはないのだわ。たとえ独り身だろうと女社長だろうと、絶対に守ってやらなければ。ああ、私の可愛いリリー。本当はもっと抱きしめたい、愛してやりたい。けれど、それは私の立場上、今はまだやってはいけないことなのだわ。この子が私を、私の仕事を認めてくれるまでは。愚かなお母さまを許して頂戴、リリー……）

脳裏では涙を流しながらも、実際は感情を顔に表さない。長年の苦勞と辛抱で身に付けた技だった。たとえ肉親であろうと娘であろうと、信用できるとわかるまで決して本心は見せず、自己防衛を徹す。それがレーナのやり方だった。

「あのね、リリー。お父さまとお母さまは、もう一緒には住まないの。分かるでしょう、リリーにも苦手な人はいるわよね。お母さま

もお父さまも、一緒にいるのがとても苦しいの」

母親の言葉を聞いたリリーは、大きな目を見開き、何度か瞬きをした。

「お母さまはお父さまが嫌いなの？」

「ううん、嫌いじゃないわ。とても好き、大好きよ。でも、一緒に暮らせないの」

リリーが言う「お父さま」はリリーの実の父親ではない。レーナの再婚相手であるアランという男のことだ。リリーは実の父親である陽のことを知らないのである。

「でもね、リリーの本当のお父さまと一緒に暮らせるのよ。とっても優しくて絵が上手で素敵な人。その人があなたの本当の父親なの」
最後の部分だけにあえて「父親」という言葉を使った。レーナにしてみれば、敬称というものはただの飾りに過ぎない。彼女はそれよりも、あのすばらしい男が娘の父親であることを強調したかったのだ。

「本当のお父さま？」

「そうよ。あなたにそっくりだわ。もうすぐお会いできるのよ。だから、早くきれいな洋服にでも着替えて、髪を整えてもらいましょう。人を呼ぶわ」

「はい、お母さま」

リリーは何が何だか分からないまま、曖昧に返事をした。いつもレーナはこうだ。だが、少女に逆らえるほどの知識や能力があるわ

けもなく、携帯電話を取り出した自らの母親を虚ろな目で見つめていた。

（わたしの、ほんとうのお父さま。わたしに似ていて絵がお上手ですてきでやさしい、ほんとうのお父さま。一体どんな人なんだろう）

幼い少女は僅かながらも儚げな希望を胸に抱いていたが、それでも母親に対する大きな戸惑いが消えることはなかった。

眩しく感じられるほど十分ではない僅かな朝日を浴びながら、耀は欠伸を噛み殺した。ネムイ。何度もこの三文字が脳裏を過ぎり、慌ててそれらをかき消す。オーナーに呼ばれているのだ、まさか眠いなどというそぶりは見せられまい。壁は厚く、蟻一匹さえも逃げられないような厳重な警備のため、小鳥の鳴き声などは一切聞こえない。百合の部屋は相変わらず暗く、お互いの顔さえも見えないような距離で二人は話していた。朝食を取りながらのブレックファストミーティングなのである。

「で、オーナー。お話と仰いますと？」

プチトマトをひとつ口に放り込み、耀は気軽に声を掛けた。緊張はしているが、声や態度に出るほどのものではない。

「宮村麻のこと。知ってるでしょ、あの可愛らしい子」

「もちろん。今週いっぱい、研修期間が終了するとか……」

まるで麻のことを大して知らないような話しぶりであるが、耀は麻のことを隅から隅まで調べ上げている、

「そう。あの子にね、内定のお話があるの」

「麻に、ですか？」

動揺で一瞬カトラリーを持つ耀の手が止まったが、その手の動きは直ぐに再開した。

「アメリカのとある財閥の会長さんが終身雇用で雇って下さるんで

すって」

「それはそれは」

耀は微笑み、珈琲を流し込んだ。内心では戸惑いを覚えていたが、まさかそれを露にすることはできない。

（私はこのひとに大層お世話になった。たかが一人の女を愛したがために彼女を裏切ることはいけないだろう。彼女のために、麻のために、私のためにも、麻を引きとめてはいけないのだ。麻はきつと幸せになれるのだろう。第一、私が一方的に麻を愛しているだけなのだから……）

「それでね、奥様と離婚された方だったの、その会長は。で、先日お見えになったとき、直接麻に会って、大層彼女を気に入って下さってね」

「なるほど」

ふんふんと頷く。

「麻を後妻にしたいって」

「後妻、ですか……。あまり感心はできませんね」

「あら、どうして？」

百合は意外そうな表情で紅茶を啜る。

「女つたらしの男にわざわざ渡すのもどうだか」

「思いもしなかったわ、あなたがそんなことを言うなんて」

クスクスと百合は笑い、イングリッシュマフィンの端を千切り、口に放り込んだ。耀がぴくりと眉を上げ窓の外を見上げると、百合は

さらに笑みを深くした。まるで心の内側を抉られるような視線である。少々の不愉快な感情を抱きながらも、耀はできるだけ愛想のよい表情を作った。百合の態度を見る限り、それは成功したようである。

「麻がいなくなつて何か不都合なことでも？」

「いいえ。別に」

「照れなくても良いわよ。あなたとあの子はね、とっても似ていると私は思うの」

自分が麻に似ている？ どういった意味だろうか、と耀は首を傾げた。百合はさも面白そうにナプキンで唇を優雅に拭い、豪華な椅子に背を預けた。きちり、と古い椅子は音を立てて軋む。

「そうね、挙げればキリがないけれど、たとえば照れ隠しが下手なところとか、そんなには焦らないところとか」

百合はニヤニヤと笑い、煙草に火をつけた。耀が愛用しているゴールデンバットとは違い、優雅で女の色香を匂わせる芳香だ。思わず耀は銘柄を尋ねそうになったが、この場には相応しくない話題である。咄嗟に口から出掛かった質問を噛み殺すため、珈琲をぐびりと飲み干した。大きなダイニングテーブルの傍には背の高い大きな時計が置かれている。古風なそれはなんともいえない心地よさのあるリズムで時を刻み、それはまるで女の鼓動のようだった。似ているのだ、抱いたときに感じるあの音の感触に。

「凶星だったの？」

不意に百合が口を開く。耀は内心慌てながらも表情では平静を装い、答えた。

「いいえ。たしかに、麻は面白いですけど」

「ほら、そういうところが似てるのよ。二人とも、自分に対してちつとも素直じゃないの。他人には比較的正直なのに、自分に嘘をついてばかり」

そうですかね、とわざとらしく微笑み、再び珈琲を流し込む。何度もその行動を繰り返しているうちに百合に本心が分かってしまったのか、百合もまた、耀と同じように微笑した。何もいわずにひたすら耀の顔を見つめ、彼から先に何かを言い出すのを待つ。その間、二人の間に流れたのは、傍で仕えていたメイドのドレスの裾が擦れる微かな音と、時計が生み出す無機質で冷たい音だけだった。普段なら心地よい沈黙も、相手が陽や百合となるとひどく不快だ。耀は展開に困惑しながら、やっと口を開いた。

「私は、麻を大切に思っています。女としてではなく、自分が教育した‘商品’として、そしていち友人として。ですから、彼女が幸せになれるのならば貴女がどのような手段を選ぼうと私には構いません。たとえそれが私と彼女を一生離すようなものでも」

耀の言葉に、百合は満足げに笑った。だが、耀は再び視線を鋭くし、さらりと言う。

「でも、先ほども言ったとおり、麻が幸せになれるならば、の話ですよ」

「なるほどねえ……。分かったわ、あなたの意見も含めて検討させて頂くわ」

「ええ、ぜひ」

百合はにこりと笑った。どうやら、耀にこのことを言わせる事が目

的だったようだ。騙されたような感覚に急に陥り、耀はオムレツの最後の欠片を口に放り込んだ。時刻は7時45分、研修がもうすぐ始まってしまう。

「ああ、もうこんな時間だ。失礼します」

「どうもありがとう。研修もよろしく頼むわ」

「ええ、もちろん」

嫌味なほどの白々しい笑みを作り、耀は軽く百合に一礼した。

（この女は間違いなく何かを企んでいる。それも、私や麻にとって不利にならないような何かだろう。けれど、それを知る由は私にはない。しかし、それもきつと時間の問題だ。なんとしても早くに知り、麻を守らねば）

堅い決心を胸に抱き、重い木製の茶室の扉を押し分け、耀は歩き出した。

「核兵器、反対、あなたの温かい救いの手を！ さあ……さあ……！」

ゾクゾクするような誘いの文句だ。声を枯らした若者たちのデモの声を聞き、30代前半程度であろう男が椅子から立ち上がった。窓を開け、そこからカメラを翳し、レンズに写す。まるで怪しい宗教の熱心すぎる勧誘のような叫びに、幸次郎は背筋を凍らせた。

「父さん……。僕、やっぱり母さんと行くことにするよ」

ぽつり、ぽつりと言葉を漏らすように囁く。少年は冷たい表情で俯きながら話していた。そんな幸次郎の様子に男は虚ろな目でカメラのレンズから目を放した。

「そうか、そうか」
「うん」

少年は男の手を握り、頷いた。ほろり、と涙が華奢な手に零れる。無表情で少年の涙を見つめながら、男は空を見上げた。濁った色だ。無言で幸次郎の肩を抱き、男は微笑んだ。幸次郎は男の息子だったのだ。だが、その親子の縁はいま、繋がりを切られようとしていた。

（いとしい息子よ、おまえはあの女を信頼しているのか、そうなのか！ 卑怯だ……こんなにも弱弱しい少年を術中に陥れるとは。どうしてあんな女との間におれは子供など作ったのだろ。かわいそうに、かわいそうに！ そういえば、おれはこいつと同じ……いや、

少しばかり年上のときも間違いを犯したんだ。名前をなんと云った
だろうか……あの美しく綺麗だった女の名をなんと云っただろう。
あの女と結婚し、子供を作るべきだった。女房との子供……幸次郎
も十分かわいい。だが、やはり……あの女との子供は格別だったに
違いあるまい。ああ、ああ！おれはとんだ失敗を犯してしまった。
時間に焦らされたがために、こんなにも綺麗な目をした少年を不幸
にってしまったのだ！）

「母さんを大切にするんだよ。おまえはおれの誇りだ」

「うん。わかつてるよ、父さん。父さんも元気で」

ああ。二度と会えないかもしれない息子への最後の言葉とは思えぬ
ほどの素っ気無さだったが、それが逆に幸次郎を笑顔にさせた。父
さん、愛してるよ、だって僕の父さんは父さんだけだもの。その一
心を込めた笑顔で、幸次郎は部屋を去った。大きな瓶を左手の脇に
抱え、彼は静かに出て行ったのだ。その瓶は五年後に味わいなさい、
と父が渡したロマネ・コンティのボトルだった。母にそれを見せれ
ば、大層に騒ぐことだろう。母は料理研究家なのだ、ビーフシチュ
ーが云々などと言って取り上げられてしまうに違いない。少年は父
からの最後の贈り物と挑戦として、この瓶を母親から隠し通そうと
いう旨を心に決めたのだった。

「遅いわ、幸次郎。3時の飛行機に乗らなければいけないのに」

「ごめんなさい、母さん。父さんにさよならを言ってきたんだ」

少年は俯き、苛立った様子で早口に話す母から顔を背けた。母は大
きな鞆を片手に、しきりに携帯電話を触っている。これから離婚し
ようとしている亭主のことなど、少しも気に留めていないようだ。

少年は少しばかり、父親に別れを告げてしまったことを後悔した。幸次郎は実を言うと、母よりも父のほうが好きなのである。だが、父についていかなかったことには理由があった。

（父さんには、きっと僕以外に大切な人がいるんだ。母さんよりも、僕よりもたいせずつと大事な人がいる。もしかすれば、子供だつているかもしれない。いや、それとも恋人なんかじゃなくて友達かなけれど父さんは優しいから、母さんが嫌いなわけではないんだ。伯父さんのことが理由かもしれない。いや、お祖母ちゃんか、それともお祖父ちゃんか？ いや、でも父さんは僕と母さんに色々してくれた。父さんには幸せになる権利があるんだ。だから、僕はどんなことがあっても父さんを不幸にしてはならないのだ）

幼い少年だったが、その思考は吃驚するほどにしつかりとしたものだった。彼の表情は常に緊張し、唇は青白く震えていた。大人はしきりに彼のことを心配したが、彼にはそんなことはどうでもよかった。もっと重要なことはたくさんあったのだ。はたして、彼ほどに健気で子供らしくない子供を見たことないという大人はとても多かった。

「さあ、早くかばんを持ってきたさい。そうしたら朝食のケーキを切るわ」

「いつものチョコレートのやつ？」

幸次郎がかばんのなかにいそいそと本を詰め込みながら聞くと、母親は笑った。エプロンを腰に巻きつけながら、彼女は言った。

「ばかね。朝からチョコレートケーキなんて食べられる人がいるのかしら。メープル・ケーキよ」

「僕は大丈夫なのに」

ちえ、と少年が唇を尖らせた。母親のチョコレート・ケーキは彼の好物だったのだ。幸次郎の歳は、もう15にもなっていたが、それでも彼はまだ幼い少年だった。綺麗で純真な心を持ち合わせ、彼は疑うことなど知らない。そのために、彼は幾度となく傷つけられてきたのだ。

「ところで、明日はどこへ行くの？」

「明日は伯父さんのところへ行くわ。覚えている？」
「アカル伯父さんでしょ？」

そうよ、と母は頷いた。彼女が大きな皿に狐色の焼き菓子を並べ始めたので、幸次郎はあわてて手伝いに近寄った。

「あつ……、ごめんなさい！」

高い声が耳を突く。反射的にこちらこそ、と言おうと顔を上げると、声の主と顔が合った。綺麗な顔である。

幸次郎は母に連れられ、きたこともないような大きなビルのなかに来ていた。大手の会社だと母は行つたが、会社というよりは城のようである。実際、多くの人々がなかに住んでいるようだった。母が用事を済ませると言つて消えていった間にふらふらと歩き回つてみると、色々な光景が見られた。食事や茶をしている者もあれば、ロビーらしき場所で分厚い本を膝に乗せて熱心に勉強している者、楽しげに話している者もいた。特に変わった様子には思えなかったが、ひとつだけ、彼が不可解に思ったことがあつた。みな、やけに整った顔立ちで、しかも揃つた純白のワンピースを纏っているのである。彼はこの数時間のうちに建物を巡回したつもりでいたが、不器量な者は一人と見かけなかった。まったく不思議な会社である。それも、莫大な面積を誇っているらしく、ただでさえ大きいと思つた今の建物も、全体の一部に過ぎないらしかつた。窓から身乗り出してみると、同じような造りの大きな建物が幾つも見える。

（それにしてもでっかいなあ。母さんたら、一体どこへ行つたのだろつ。おっかないなあ）

少々腹が空いたため、食べ物をくれそうな人でも探そうと歩きまわっていたところ、みなと同じく綺麗な顔をした女とぶつかつてしまった。幸次郎は気を取り直し、きちんと非礼を詫びた。

「こちらこそ、すみません。……あの、あなたって、とてもすてきですね」

「あ、はあ……」

彼の突然の言葉に、女はひどく戸惑ったようだった。それもそうだろう、女は恐らく20代、そして幸次郎はまだ10代の少年なのだ。

「お名前はなんと仰るのですか？」

「私？」

幸次郎が聞くと、女はなおいつそう顔を曇らせた。明らかな困惑が見える。幸次郎はこくりと頷き、ぶつかった衝撃でよろけた彼女に手を差し伸べた。女は照れたように微笑み、ありがとう、と彼の手をとった。美しいというよりは、可愛らしい印象だろうか。もちろん、彼女よりも美しく派手な女は、先ほど何人もみた。だが、彼女の場合は何かが違うのである。派手なわけではないのだが、とても可憐で可愛らしいのだ。内面から輝きが溢れている、そんな姿だった。

「僕は、幸次郎。常葉幸次郎といいます」

彼の言葉に、女は再び微笑んだ。幸次郎の手に、一瞬力をかけて立ち上がり、彼女はさっと言った。

「私はね、宮村麻というの。秘書課の人間です」

「あささん。宮村麻さんですね。わかりました。どうもすみませんでした」

いいえ、と麻が去ろうとすると、幸次郎ははっと声を漏らした。

「あの、何か食べるものを頂けませんか……」

彼は自身の発言をひどく恥じていた。豪華な絨毯が敷き詰められた大きな廊下では、恐らくクリスタル製であるうシャンデリアが輝いている。場違いな発言なのだ。だが、麻という女はそのことを気にしている様子はなく、ごく普通の表情で振り返った。

「お腹、空いてるの？」

「はい」

「じゃあ、これ食べる？」

まるで幼児が見知らぬ何かに向かって物体を渡すような目で、麻は幸次郎の目を見た。きょとん、といまいち状況を理解していないようだったが、彼にまだ温かい包みを渡した。

「これは……」

「お握り。梅干、嫌い？」

麻ははにかみつつもにっこりと笑った。その様子に幸次郎までもが思わず笑顔になったが、彼はまじまじと手渡された包みを尚も見ていた。お握りなどというものを食べたことがあまりない彼にとって、それは珍しいものだった。それも、このような豪華な場所で、質素なお握りを、だ。ものめずらしさと明るい照明に、彼はくらくらと眩暈を覚えた。

「あ、駄目だった……？ ごめんね、パンか何か……」

「い、いいえ、大好きです。すいません、頂きます……」

見知らぬ者から食べ物をもらう。これは幸次郎にとって、前代未聞

のことだった。だが、この麻という女なら、信用できる気がしていたのだ。根拠もなく、彼は無邪気にはくりとお握りに齧り付いた。甘い米の味と、やさしく甘酸っぱい梅干の香りが口内に広がった。決して飾らず素朴だったが、深くやさしい味だった。行ったこともない田舎に帰ったような感覚が、幸次郎の脳内に広がった。お握り、麻、お握り、麻。同じ想いがぐるぐると巡った。母は妙にハイカラで見栄っ張りなのだ、よほどのことがない限りお握りなどは作らない。母の料理は確かに美味しく、極上の素材を使用したそれは一級品だ。だが、何かが違う。温かみがないのだろう、母の料理には。きつと。

「おいしいです」

「そう？ よかった」

ほわあ、と温かい湯気でも沸きそうなほどにしつとりと麻は笑った。その笑顔にまた、幸次郎は魅せられていった。

「あ、麻さん！ どこに行ったのかと思ったら、こんなところに」「まなみちゃんー。どしたの？」

麻は少年の横で屈んでいたが、不意にやってきたまなみが上から声を掛けたので、立ち上がった。ひらりとワンピースの白い裾が翻り、空調の聞いた華美な廊下で優雅に揺れる。少年はまるで百合の花を眺めるかのように、麻の眩しい姿を見ていた。だが、まなみは少年に気を留めていないようだった。

「いや、ちょっと用事があった」

まなみはふと眉をひそめ、麻の耳元に口を近づけ、声を潜めて囁いた。

「女性のね、菊果さんて方なんだけど……」

菊果。麻はその名前に、びっくりと肩を震わせた。懐かしい響き。甘くやさしい記憶。思わず自身の肩を抱いた。不思議そうに見つめる少年やまなみの様子など気にしていないように、彼女はぴしっと背筋を伸ばした。まなみを正面から見据える。

「やー、久しぶりね、麻ちゃん。まあ綺麗になつてー」

「お姉さん、どうされたんですか、こんな遠くまで」

控えめながら美麗な色目の着物を着た女の行動に、麻は気づかれぬようそつと溜息を吐いた。廊下で呼び出された麻はそそくさと客人用の茶室へ向かったが、予想通り、そこに座っていたのはあの女だった。嫌な女でもなく、嫌いでもない。寧ろ愛していた。だが、彼女の雰囲気はとも絡みづらいものだった。花街特有の女性の上品さや鋭さ、そして会話の巧さが少し苦手だったのだ。人身売買の商品なら何ら変わりはないのでは、となるかもしれぬが、本人からすればこれは大きな違いなのである。何より、勤める世界と気力の度合いが違うのだ。

とにかく、麻は少々考え込みながらも、遙々やってきた客を一生懸命もてなそうと努めていた。傍にはまなみや数人のメイドの者たちが付いているが、みな目下にあたるため一言も口をきかないのである。麻の態度に気付いているのかいないのか、着物の女は大袈裟に肩を竦め、大きな声で言い放った。

「それがねえ、うちのおかあさんがボケて。うちのお姉さんらも何かと手え焼いてんだけどね、やっぱ婆さんだし、どうも大変で」

置屋の婆が認知症にでもなったということだろう。麻はピクリと眉を顰めた。だが、彼女も着物の女にも多少のプロ意識や慣れというものはある。二人は笑みを湛えたまま、数秒間見詰め合っていた。

「そう……。西のお家のおかあさまには、私もお世話になって」
「そ。ま、うちもその他の妓も座敷があるしさ。どうしようかって迷ってたのよ。まあ、気晴らしにつてあんたに会いにきたわけよ」
「…うそばかり。で、本当の用件はなんなんですか」

菊果の肩がびくりと動く。

「あー……。んーとね、結婚」

ばれてしまったからには。そんなことを言いたげな表情で、菊果は躊躇いもせず言った。けっこん。その四文字に、麻は文字通り飛び上がる。周囲にいたまなみやメイドたちも驚いてはいるが表情は崩していないようだった。菊果だけは、平然としている。

「あら、百合ちゃん、まだ言ってなかったんやー…」

菊果はふんと意外そうな言葉を出しながらもまったく驚いてはいないようだ。彼女は麻が考えていた以上に、この組織に精通していた。どうやら百合とも繋がりがあのようなのである。道理でこの待遇だ、と麻は周囲を見回し頷いた。

「それで、どう。やっぱり嫌？」

「別に……。いいですよ」

「あら、そお？」

菊果は不敵に微笑み、まなみに目配せをした。麻は黙ってその様子を見つめていたが、何も答えない。驚くほどに、あっさりとした答えだった。まなみは眩暈もする思いで、二人の様子を眺めていた。お金、立場、愛情、結婚、あとは……？　ぐるぐると、わからない

世界の言葉が彼女の脳内を廻る。そうこうしているうちに、すっかり麻と菊果の話は済んでしまったようだった。

「じゃ、ちよつと百合ちゃんとか行こうかな。30分ほどでまた話しに戻るから」

突然、軽い命令口調で言いながら、菊果はそろりと立ち上がった。そばで突っ立っていたメイドの一人が慌てて彼女に近寄り、茶室の外においてあった履物を差し出す。彼女は微妙な笑みを消さぬままそこを去り、残された麻とまなみに妙な空気を残していった。

「……っあの、麻さん」
「何？」

まなみの突然の言葉に、麻は白けた表情で膝を抱えた。正座をしていたので脚が痺れているらしい。まなみは下唇をかみ締めながら生真面目な表情で麻と向き合っていたが、麻はそっぽを向いて切なそうに天井を見上げていた。開いた窓から吹き込む風が彼女のワンピースの裾を翻す。己の裾をも掴みながら、まなみは麻に近寄っていった。畳と薄い生地が擦れる音が聞こえる。一人残されていたメイドは気まずそうに俯いた。相変わらず、麻の冷たい視線はまなみを見ていない。

「麻さん、あの、その……」

まなみが気まずそうに口ごもると、麻はこれまでは様子を変え、ゆつくりと振り向き、ため息を吐いた。

「マナちゃん、もしかして」
表情を少し和らげながら、麻が言う。

「吃驚してた？」

無言で首を縦に振りながら寄り添ったまなみをじっと見ながら、麻は不思議そうにきゅっと自らの膝をきつく抱いた。

「たぶん」

「そっか」

短い言葉を交わした後、二人の間に沈黙が流れた。誰もそれを切り出そうとは思わなかったが、麻が不意にまなみの手をそっと取った。

「菊果さんね。私が子どものときに、すごくお世話になった人。いつもあの人に助けてもらって、私が学校に行ってまともに教育を受けられたのも、殺されたりせずに済んだのも、毎日のご飯でさえ食べられたのもみんなあの人のお陰なの。私が売られた先——西家、さっき言ってたお家ね。そこのおかあさんがとて厳しくって」

麻はしんみりと寂しげに言った。この人はどこまで自己犠牲を徹すのだろうかとまなみは素朴な疑問を覚えたが、黙って耳を傾けることにした。麻はまなみの様子など微塵も気にせず話を続けてゆく。残されていたメイドは独り言のように、用事ができましたのでと呟き、そそくさと出て行ってしまった。

「あの人も相当苦労してきた人だから。お姉さんが必死の思いでやっと手に入れたものを、私なんか壊したくない。だから、私が行かなくちゃいけないかなあって」

微笑を浮かべたままきつぱりと言った麻に、まなみはやつこのとで声を絞り出した。まるでカエルのようにかすれてしまっている。放心したように、囁いた。

「耀さんは？ 陽さんは？ ……私や伊里ちゃんは？」

もともと大きくつぶらな瞳をさらに見開いたまなみを、今度は麻が凝視した。どうやらまなみが彼女に疑問を吐いたこと自体に驚いたらしい。和室の畳を半ば撫でるようにしながら、風で乱れた髪を麻は直しながらまなみをじっと見つめていた。彼女のきつい視線に目を逸らすことができず、まなみも戸惑いながら彼女を見ている。

「そんなの……。だって、マナちゃんや伊里ちゃんだっていずれ売られるじゃない、ここは人身売買をする会社なんだから」

考えてみれば、当然のことである。まなみは一瞬怯み、下唇をかみ締め、俯いた。そうだ、麻に限らず、自分だっていつかは売られるであろう身ではないか。どうしてあんなにばかなことを聞いたのだろう？ まさか自分が永遠にここで暮らせるとは思っていないはずだったろうに。そう、いつかは誰かの奴隷となって生きるのに！ 彼女は自身に対する怒りを覚え、黙って麻と同じように膝を抱えた。

しばらくの間、閑静な和室で沈黙を守っていたまなみが不意に立ち上がった。数十分前の失言などなんでもないように立ち上がり、麻の肩に手をかけた。

「ね、麻さん。私が何とかします。私が」
「へ、何が？」

麻の目が驚きでぱちくりと瞬いた。普段のまなみからは想像できないような言葉がまなみの口から出たためだ。

「私が何とかしますから、絶対に。だから結婚なんてしないでください」

この後輩は気でも狂ってしまったのだろうかと麻は驚いていたが、まなみは至って冷静だった。何のことはない。ただ、大切な先輩を守りたかっただけだったのである。とにかく、まなみはそれだけ言い、それっきり黙ってしまったかと思いきや麻の頭上からぼろぼろと涙を溢し始めた。大粒の水滴が麻の髪や首筋、目元に零れる。それを拭いながら、麻は慌てて立ち上がった。

「マナちゃん、マナちゃん？」

いつもの優しく無邪気そうな麻の顔だ。先ほどまでは絶望で灰色に変わっているような錯覚を与えるほどに暗い表情をしていた麻だったが、その姿はどこかへ消えてしまっていた。まなみは黙ってしばらく嗚咽していたが、やがて麻を引き寄せ、抱きしめていた。まなみは麻より年下であるが、背はいくらか高い。抱きつこうとも振

り払おうともしない麻を華奢な腕で抱きしめ、まなみはその肩に自ら頭を預けた。まなみの細い腕が麻の背中に絡む。麻は無意識にその細い腕をそつと握っていた。

「守りますから、私が。麻さんは何にもしないで、どこにも行かないで……」

はじめて触れたまなみの腰は、女性らしくふっくらとしていながらも、驚くほどに細くやつれていた。

「お願い、お願いですからどこへも行かないでください。どうしてもそんなに苦しもうとするんですか。 ばっかじゃないんですか……」
「へ、あの、マナちゃん？」

ぼろぼろと尚も涙を流しながら、まなみは叫ぶ。その様子にさらに驚いた麻は彼女に抱きしめられたまま疑問を浮かべた表情で尋ねる。それにしても強い力だ。あの細い体のどこから来ているのだろうか。麻は場に合わせぬ疑問を浮かべる。

「麻さんのばか。なんで体と顔を利用してまでそんなことするの？ 私には理解できません、たとえ同じ売られる身だとしても。愛される価値があるのに、愛される権利があるのに、愛する人がいるのに……。 なんてたつてそんなに自分を、物、扱いするんですか……」
「だって……物も同然だもん、私たちには値札がついてるんだよ」

訳も分からず掻き抱かれたままの麻はもごもごと囁いたが、まなみにそんなことを気にする余地はない。

「だから何なんですか！ 私には愛する資格がないんです。愛したい人はいるのに愛する権利も度胸も何もありません。一文無しです。」

別にそのことに対して大きな未練も欲望も何もないですし……正直私の恋愛はそれでいいと思ってます。だけど、だけど」

「でもさ、そんなこと言っても仕方ないよ、結局はぜんぶ終わっちゃうものなんだから」

麻が思わず彼女の言葉をさえぎった。まなみは麻の発言に、信じられない、といった風な表情を見せた。そして、まなみは突然、思い切り麻の胸を押し、彼女を突き放した。当然、麻はその衝撃で床に尻餅を吐き、華奢な体ながら、大きな音を立てて床にへたり込んだ。彼女は一瞬声も出さずにじっとまなみを驚きの目で見つめていたが、まなみは涙目できつく麻を睨みつけた。麻は予想のつかない展開におどおどと戸惑っていたが、まなみはふん、とでも言わんばかりに先ほどとはうって変わった態度をしていた。だが、やはりまだ涙が次々と目尻からこぼれている。大粒の滴が畳を濡らした。

「あなたの愛がそんな程度の軽いものなら、もう……、もう二度と耀さんに近づかないください」

そついい残し、彼女は不満そうに大きな音を立てながら和室のふすまを閉め、出て行った。辺りに響き渡るほどのけたたましい音だ。麻はただただ呆氣にとられながら、へたり込んだまま乱暴に閉められたふすまをぼんやりと見つめていた。

まなみが出て行ったあと、驚きで誤解している箇所はあるものの、麻は相変わらず姿勢を整えずにいた。疑問で沸きそうなほどになりながら考え込み、先ほどまなみが言っていた言葉の意味を一生懸命汲み取ろうと考える。そうしているうちに、百合のところへ行っていたらしい菊果が戻ってきた。彼女は訝しげに麻を見、首を傾げな

がら部屋に入った。

「どしたの、麻ちゃん、そんな格好して。なんか出た？」

「幽霊なんか……」

どっかりと横に座った菊果の大きな笑顔を見つめながら、麻は震える声で応えた。この数十分の間に何があったのだろうか、と菊果は少しは気にしていたが、そこまで深く考えてはいなかった。気楽そうにどっしりと構え、彼女は冗談のつもりで腕を大きく広げた。

「そう、お化け出たんやあゝ。よしよし、おいで」

いつ麻が怒り出すだろうかと菊果は着物の袖をたくし上げながら愉快そうに麻の顔を見ていたが、やがて、麻の顔に張り付いていた不安そうな表情が変わった。どんどん、どんどん、力の抜けたものへと変わり、やがてその顔はこちらへ迫ってきた。さすがに驚いた菊果だったが、手を引っ込めようとはしなかった。麻はそれをいいことに、まるで気でも狂ってしまったかのように、菊果の腕に飛び込んだ。先ほどのまなみのようにしゃくり上げ、幼児のように泣きつく。その姿は、数年前と大して変わっていなかった。

「おねえさん……きくかさん……っ！」

子どものように顔をゆがめ、わあわあと泣き出した麻に、菊果はその展開を予想でもしていたかのように大人らしく彼女の頭をそつと撫でた。

「あらあら、何も変わってないし……。さっきの冷たい態度見てちよつとは大人になってくれたって思ってたのに」。はい、はい、もう泣かんというよ」

菊果は口では母親のように麻を嗜めていたものの、その表情にはどこか嬉しそうな微笑ましい優しさが伺えた。久々に誰かに甘えられ、嬉しかったのかもしれない。泣き叫ぶも同然なほどに大きな声で嗚咽を漏らす麻の背中を強く摩りながら、菊果は彼女を抱きしめた。

「まーた麻さんとケンカしたんですかー？」

まなみが盛大なほどの大きな溜息を吐くと、伊里はまたかと呆れたように彼女を眺めていた。まなみが些細なことで落ち込むのは日常茶飯事のことだ。まなみの不安の原因が、鈍い麻の余計な一言であることは伊里にでも明確だった。まなみは麻の言動で知らず知らずに空回りし、麻は気付かずそのまま自由に振舞っているのだ。すっかり此処での生活に慣れた伊里にとって、先輩二人のすれ違った関係は悩ましいものだった。

「そんなに気にしなくていいと思いますよー、麻さんのことは。あの人、ああ見えて結構抜けてそうですしね」

伊里があははと怖気づきつつも笑うと、まなみは再度溜息を吐いた。

「んー、でもなあ」

「そんなにひどいケンカしたんですかー？」

「うん、相当」

まなみがこくりと頷く。伊里が興味深そうに、アイスティーのグラスを翳しながら問い詰めると、まなみは吐息交じりに囁いた。

「あのね、私、麻さん突き飛ばしちゃった」

「はあ？」

伊里が首を傾げる。まなみはさらに気まずそうに言った。

「ドン、って。どうしよう、怒ってるかなあ……」

伊里は思わず黙り込む。すると、まなみは酒で赤らめた頬をぼろとさせながら囁いた。部屋中の冷たい空気が、背中に集まるようになる。狭い部屋のなかでは何も感じられないようだった。ベッドにひとりで倒れこむ。

「ねえ、もう気付いてるんでしょー？　ねえ、いおりん」

彼女は相当酔っているらしい。右手に持っているビールの缶と呂律の回っていない舌がそれを示していた。まったく数ヶ月前の麻と大して変わっていないではないか、と伊里は溜息を吐いた。ここに来てきてしばらく経ったが、最初はすっかり者だと思っていたまなみの印象がすっかり変わっていた。意外にも、彼女は一度何かに熱中すると周りが見えなくなるような性格の持ち主であったのだ。真面目さと几帳面さのあまりだった。何か自分に興味のあることや重要なこととなると怖いほどに真剣に取り組むのだが、そうでないとなんで脱力したようにくたりと萎びている。鈍感な麻も、真面目すぎるまなみも、伊里にとっては振り回される原因となる悩みの種の一つだった。半ば頭を抱えるような姿勢に座りなおしながら、伊里は仕方なく問い返した。

「何が、ですか。あとそのあだ名はやめて下さい」
「うん」

それだけ言い、まなみはにつこりと微笑んだ。素面のときと変わらない、人の良さそうな優しい微笑だ。その笑顔のどこからこのセンチメンタルなマイナスさが来ているのだろうか、と伊里は思わずまなみの腕を突いた。

「で、知ってる、って何のことですか？」

伊里がいうと、まなみは酔いで火照った頬をさらに赤く染めた。最年長である麻がいらないのをいいことに、まなみは麻の管理下にあった大量のビールを無断で山ほど飲んでいたのだ。まなみはそれに気付いている様子もなく、ぷはあと息を漏らした。

「だーかーらあ、私が麻さんのこと好きなの知ってるでしょー」

ぼたり、とアイスティーの入ったグラスの側面から透明な水滴が落ちた。氷がかたり、と伊里の手の中でグラス越しに揺れる。彼女はそっとそれをサイドテーブルにおき、姿勢を改めた。ベッドに寝そべっていたまなみが、気だるそうに寝返りをうつ。

「はあ？」

「あたし、麻さんが好きなんだよねえ」

まなみが力なくへらへらと笑う。伊里は黙ってまなみの元に寄り、その抜けた笑顔を下からじっと眺めた。

「あ、気持ち悪いって思ってるでしょー、女同士なんて。残念、私、そういうひとなんだなあ」

「気持ち悪いだなんて、思ってますんけれど！」

ふふ、と自虐的に笑ったまなみを思い切り睨み、伊里はその勢いで思わず立ち上がった。膝に抱えていた雑誌が落ち、その衝撃でけたたましい音が床を叩いた。まなみはへらへらと笑ったままそれを黙って見つめ、ちらりと伊里の顔を見上げた。伊里もその瞬間、まなみを見ていた。結果的に二人は気まずそうに見つめあっているこ

とになる。

「なんで、なんで気持ち悪いとか言っんですか。それに、まなみさん、さつき麻さんに『あなたの愛がそんな軽いものなら』なんて啖呵きつてきたばかりでしょう？　どの口がそんなこというんですか！　気持ち悪いなんて微塵も思いません。いいじゃないですか、好きなら好きで。そういう言い方するって、私、どうかと思いますよ。麻さんにも、まなみさんにも、良くない言い方だと思っています」

相変わらずきつく睨みつけながら、まるで先ほどまなみが麻にしたように睨み付ける。まなみは急に神妙な面持ちで頷いた。開け放した窓から、寂しい風の声が聞こえる。それを無視してまなみは口を開いた。

「うん。ごめん。けど好き。なんかねー、もうあの人が耀さんとか陽さんとイチヤイチヤしてるの見るの、つらい」

「そうですか」

ぽふつとベッドに腰を下ろした。虚ろな目で枕を眺めるまなみに手を伸ばす。華奢な肩に触れ、小さく揺さぶった。なんだか、こう沈黙を破ってはならないような気がして、伊里はさつと窓の外へ目をやった。深い闇が、建物を包んでいる。いっそ、あのなかに消えてしまえば良いのに、とでもまなみは思っているのだろう。つまりない気もちを察しながら、伊里は深い溜息を吐いた。

「待って下さい」

ふわりと、麻の香りが辺りに広がった。同じシャンプーの匂いにする。くしゃくしゃとその頭を撫でながら、耀は彼女を抱き寄せた。数センチ下に吐息がかかり、彼は柔らかい体をきつく抱きしめた。白いワンピースに皺がよるほどきつく掴み、部屋の中で、彼女を捕まえるも等しく腕の中に拘束した。菊果と同じような香りがするのは、先ほどまで一緒にいたための残り香だろう。

「なに？」

「もう少しだけ。いいワインが入ったんです、ご一緒しません？」

「それ……は」

麻は気まずそうに下唇をかんだ。迷いが脳裏に広がる。後輩たちが自分のことで揃って悩んでいる不味い空気にあるだろう寮へ帰るべきか、それともこの上司とも友人ともつかない男と夜を飲み明かすべきか。迷い顔の麻に微笑しながら、耀は二本のグラスをテーブルに置いた。どこからともなく石榴色の瓶を取り出し、延々と音を立てながらワインをグラスに片手で注ぐ。麻は黙ってその様子を見ていた。

（どうしよう。マナちゃん、伊里ちゃん、ごめんね）

それだけを脳内で軽く吐き出すと、麻は抱かれていた耀の右手から離れ、ソファに座り込んだ。

「これ、何？」

「1992年のペトリウス。サラミはありませんよ」

ニコニコと微笑みながら、耀はワインを口にする。麻は物欲しうにその様子をじっと見ていた。そもそも麻のこの表情が耀の狙いだったのであろう。彼はもう一方のグラスを麻に差し出した。

「ありがとう。……え？」

渡したかと思いきや、それを手繰り、やはり先ほどと同じように麻をこちらへと寄せる。

「え、なんで？」

「まだダメですよ。どうしても、つてのなら」

耀はこくつとグラスを傾けワインを少し多めに口にした。よくわからない、といった様子でこちらを眺めている麻を抱き寄せ、火照りで赤くなった唇に大胆に口付けた。衝撃で開いた麻の口へ、ワインが流れ込む。息苦しさに吐息を漏らしながら、口中のワインを処理するため、懸命に飲み込んだ。それでも耀が変わらず口付けながら、さらにワインを流し込むので追いつかない。とうとう麻が咽そうになるまで、耀は彼女を放そうとしなかった。

「ん……、はあっ」

苦しそうにけけけと喉元を押さえ、息苦しさに眩暈を感じた麻は耀の胸のなかへ倒れこんだ。彼女の喉元から首筋へ、残ったワインの紅い水滴が落ちていく。耀は満足そうに、麻の背中を軽く撫でた。

「なにをするの……っ」

麻は今にも泣きそうに苦しそうな表情で訴えたが、そんな様子にも耀は笑みを深くするばかりだった。

「これで、貴女は私のものも同然でしょう？」

「へ？」

信じられない、といった風に咳をしながら涙目で睨む。

「……絶対に寄越しませんよ、阿呆な財閥のドラ息子なんかに。絶対、絶対」

驚きで目を見開いた麻の耳たぶに、耀は何も言わずそつと触れた。クリスタルの小ぶりなピアスが光っている。それをそつと外すと、恐らく摩擦で赤くなっていた彼女の耳に口付けた。ワインの苦味がまだ口に残っている。ぞくぞくと押し寄せるような圧倒感に堪えようと、必死で麻はワンピースの裾を握っていた。

「今回ばかりは本気ですよ？ 絶対にどこへも寄越しませんからね、たとえ貴女が社の商品であろうとね。いいです？」

麻はばつが悪そうに俯いたが、一応頷いている様子だ。耀は満足げな様子でワイングラスを放り出すと、部屋を出て行ってしまった。一人取り残された麻はぼかんと突っ立っていたが、沸いてきた鼓動の意味は彼女自身にもわからなかった。そして、まるで脚の骨でも砕け散ってしまったかのように、麻はぺたりと床に座り込んだ。誰もいない広い部屋の大理石では、音も大きく響く。冷たい床に体を預け、麻は考え込んだ。先ほど、まなみに言われた言葉をふと思い出したのだ。時刻は既に夜中の一時を回っていた。

「あなたの愛がそんな程度の軽いものなら、もう……、もう二度と耀様に近づかないでください」

彼女は確かにそう言ったのだ。

（もしかして……。もしかして、マナちゃんは耀のことが好きなのかもしれない。私が耀と遊んでるだなんて全然知らないのに。だって、私にああいうこと言うのは耀のことを想ってるからとしか考えられない！ だとしたら、そうしたら……。私は、大事な後輩を裏切っているの？ マナちゃんの想いを彼女の知らない間に踏みにじているの？ 耀は何も知らない、マナちゃんも。ましてや伊里ちゃんなんか、私たちのケンカのことだって知らないかもしれないのに……。私はなんてひどいことをしているんだろう？ 商品の分際で、社員の耀に取り入るなんて。それも、マナちゃんの気持ちをしやぐしやにしてまで。マナちゃんは気付いてないんだ、私が裏切ってること。そうなんだ、マナちゃんは、純粹に耀が好きだから怒ったんだ……）

じわりと麻の目じりに涙が溜まり始めた。先ほどから握っていたワンピースの裾にくちゃくちゃに皺をつけながら、手首で溢れんばかりの涙が零れた目を擦る。広い部屋で月明かりに、麻は一人泣いていた。彼女は、誰よりもまなみを信頼し後輩、友人、同士として愛していたのだ。そのまなみを裏切ってしまったという罪悪感が、ひどい不安と自己嫌悪、己に対する怒りを植え付けた。

「ごめんね、ごめん、マナちゃん……。お願い、許して……」

この罪は、一体何なのだろう。置き去りの戒めだけが麻の心をひしひしと痛めつけていた。麻は自分がとんだ勘違いをしているなどとは知らず、罪意識に泣きじゃくっていた。伊里に慰められなが

らばろぼろと強さの証である涙を流すまなみと、要らぬ罪悪感による弱い涙を流す麻。二人は、確実に絶望の階段を一步一步踏み始めてしまっているのだろう。月明かりに包まれ、それぞれ別の部屋で二人は同じ原因の違う涙を流していた。

「……ユウコだけは、うちが守って見せるから。何があっても、絶対」

菊果の呟きに、女将はどこか申し訳なさそうに真剣な表情で声をかけたが、菊果は気付いていたいのか、腕のなかの赤ん坊をきつく抱きしめた。生まれたばかりながら、整ったかたちと分かるその顔はどこか菊果に似ている。特に、目元などそっくりだった。愛しそうにわが子を愛でる今までにない菊果の表情を、奇妙にさえ思いながら女将は見ていた。

「ね、ユウコ。ごめん、ダメなお母さんで。芸者の子になんか産んで」

この子の今は昔のわたし、と菊果は泣きそうな表情で溜息をついた。彼女自身も芸者の娘であつたのだ。その重苦しい表情の影には、幼少の頃体験した数々の苦勞が見え隠れしていた。

「けど、この子は妾の子なんかと違う、うちが自分の意思でちゃんと産んだ子なんだから」

女将は一生懸命彼女をなだめようとしたが、菊果の怒りと憂いに満ちた目はまだそのままだった。どうやらユウコ、という名前がつけられたらしい赤ん坊は母親の様子になど目もくれずスヤスヤと眠っている。菊果はそのことに、余計に腹が立つたらしかった。少し強くユウコを腕のなかで揺さぶり、彼女は半ば叫んだ。

「だから……守るから、ちゃんとうちの言うこと聞いてよね……」

それだけ言うと、彼女は着物の裾を右手で押さえながらユウコを籠に戻し、足早にどこかへ去っていった。女将はうな垂れながらたみに座ったままでいたが、月夜の明かりが変わることはなかった。東京、銀座の置屋にはその場所独特の笑い声が満ちていた。そして、そのうち一つは紛れもなく菊果のものであつたのだった。危機を感じた女将は小さく溜息をつき、ちよいちよいと手の先で赤ん坊の頬をつついた。女将と赤ん坊のいるその部屋は菊果の化粧部屋で、昼間用の地味な着物やその帯、化粧道具が散らかっている。女将は相変わらず呆れながら、不意に泣き出した赤ん坊を抱き上げた。

「あら、あら。ゴハン？ それとも何か？」

赤ん坊特有の声をあげる。

「ああ、そうね、お母さんは今日もお客さんをとってるものね。仕方ないでしょ、本人がそういつて聞かないんだから。悠子ちゃん、頑張ろうね……」

赤ん坊は首を傾げる。そして、悠子、と初めて本名で呼ばれた彼女はそれに反応したのか、小さく呻いた。

今日は、明るい。カーテンを開けた麻は、うきうきとした気分できき上がった。まなみと伊里はどこかへ行つたようだ。飲み物でも調達しに行つたのだらう。むくりと立ち上がり、窓の外へ顔突き出した。爽やかな香りがする。外へ出たい。不意に彼女はそんな思いに駆られた。若者独特の、甘くささやかな若い気持ち。麻は自分のなかにあるそんなものに、傷ついた素手で触れていた。けれども平和というものは不思議とすぐ壊れるものだ。部屋に鳴り響いた声に、麻ははっと顔を上げた。乾いた声が、再び彼女の名を呼ぶ。

「麻ちゃん、ちょっといい？」

寮母だ。いつもの明るい雰囲気とは打って変わった、ひどく暗い表情をしている。

何か、あつたのかなあ。思わず麻は、体を硬くした。

「話があるの。依子さんの部屋で」

「私だけ？」

「ええ。とにかく、ついてきて」

明らかに態度がおかしい。麻は瞬時にして異常を悟り、はっと立ち上がった。無言で、寮母の背後につく。するとすぐに、寮母の手によつて寮の扉がかたく乱暴に閉じられた。

長い廊下を通り、依子の部屋に着くと、がちゃりとドアが閉められた。

それは陽の部屋に連れ込まれ、抱かれる直前に鳴り響く音とまったく同じだ。麻は思わずぴくりと肩を上下させた。同じドア、同じ

構造の部屋なので当然のことだ。はっと部屋のなかを見回してみると、依子や百合、そして陽までもがソファークセットに座っていた。みな暗い面持ちで、なにやら思いつめたように俯いている。背後の寮母からも同じような気配が伝わってきた。

「あの、なにか、あつたんですか」

ぼそり、と囁くように麻は言いながら後ずさりした。

「……飛行機が。おちてん」

恨めしそうに、自嘲ともとれるような不気味な微笑を浮かべながら依子は顔を上げる。その意味がわからず麻が首をかしげさらに近寄ると、陽が大きな重い溜息を漏らした。百合は先ほどからじつと腕を組み、ソファに沈み込んだままだ。その重苦しい雰囲気を感じた麻は、部屋の隅にしゃがみ込んだ。

「へ……飛行機が……」

「前から、会社のこと狙ってたらしくて……。それで、それで」

「飛行機が……？」

「……違う。テロ組織」

依子はかこん、と履いていたヒールを脱ぎ、床に投げ捨てた。

「テロ、組織？」

「そう」。数十年も前から、本社がずっと問題としてきたテロ組織

テロ組織というよりは、人身売買反対派武装団体と言った方がいいかしらね。ま、同じようなものよ。どちらにせよ、何十年も前から

ら狙われてたみたいなんだから。麻ちゃんも、知ってるでしょう？
そして、15年前、今日とまったく同じことが起こった。飛行機
が墜とされたのよ。何らかの手段で我が社の専用機に乗り込んで、
ね。衝撃だったわ。あの頃、そんなのなかったんですもの。そして
今日も……。知ってるわよね、我が社「ここは支部だから、本部と
人事交換や客人の訪問のための専用機を往復で飛ばしてるの。それ
が、また、墜ちたの……」。

百合は長々と語り、重く肩を落とした。あまりの驚きに麻はぽか
んとしていたが、同時に、彼女は百合のあまりの冷静さにも驚いて
いた。そしてぐりと見回してみると、その部屋に、耀がいないこ
とに気づく。

「あれ……。耀、さんは？」

「耀は――」

陽が、睨むようなひどくきつい目つきで、顔を上げた。

「もういいわ、いいの。ごめんなさい、それが言いたかったただけだ
から」

百合が静かに陽を遮る。なにが、良いんですか。そう言い掛けた
口を、麻は慌てて噤んだ。どんな状況であろうと、失礼は許されな
い。静かに後ずさりをし、彼女は重い扉に凭れ掛かった。重く苦し
く悲しい視線が、部屋中を惑う。

（言わない、ってことは。そういうことなんだよね？ 耀が、その
飛行機で……。冗談じゃ、ないはず。こんなひとたちじゃない……
！ 人身売買だなんて言ってるけど、あんな惨めな私を引き取っ
てくれて、こんなにしてくれた。女としての価値を、私に与えてくれ

たひとたち。そんなひとたちが嘘つくわけない、それに、どうしてこのひとたちを、この会社を……！）

商品という立場。なかば娼婦のような存在。そして、自分たちの価値を上げ、伴う値段も高くしては売りさばこうと努める邪悪な集団。そんな状況のなかでも、やはり麻は、百合たちを嫌うことができなかった。人間として扱われたことなど、ここ以外でないのだ。社会的に言えば自分やこの会社の立場が非常に危なく悪いことなどとうに承知している。それなのに、どうして。そんな重い想いが頭のなかを駆け巡った。暴力派のテロなど何も今にはじまったことではない。数年前から同業の会社が同じような被害に遭っているのである。けれども、麻の脳はなかば停止しかけていた。

「ごめんなさいー。宮村を、寮へ帰して」
「はい」

百合の命令に、寮母は機械的に答える。麻は何も口に出さなかった。ぼろりと頬から零れた涙を右手の甲で拭い、彼女は姿勢を立て直した。ぴしりと背筋を伸ばし、まるで何事もなかったかのように寮母のうしろに付く。そしてさっと一礼し、部屋を出た。

「麻、大丈夫？」
「大丈夫、ですから」

いつも通りの笑みを貼り付け、声も元に戻す。どちらも、訓練を受けているうちに身についた業だった。売られる身たるもの、叱られた程度で顔がぐしゃぐしゃになってしまっただけは仕方ないのである。とにかく麻はそうして何事もなかったように微笑み、笑顔で廊下を通り過ぎたのだった。

考えてみれば、人の死をこうも間近に考えるのは久々かもしれない。最後に死んだのは、誰だっけ。そうだ、同僚がつい最近死んだ。そんなことをぼうつと考えながら、麻は寮母と暗い廊下を歩んでいた。気分は暗かろうと、麻の笑顔は誇らしく険しくある。つい最近泣き崩れていた表情はどこへいつてしまったのだろうか、寮母は妙な無情を感じるのだった。

本性からは遠く離れた笑みを浮かべ、かつかつと床を踏みしめる姿。この女が誇りに思うものは、一体何なのだろう。数々の男に愛され抱かれた体？ 億単位の商品価値がある身体？ それとも、自らの愛くるしさを知っていたの自信か。否、中身かもしれない。頭脳かもしれない。形容のしようがない気分になった。傍で見守るだけの、リンク外の女として、自分はどうかなのだろう。寮母は、まるで花魁について歩く吉原の女将のような気持になるのだった。

「ね、麻」

「なんですか？」

「今日。研修とか休みなさいよ」

意味もなく目を逸らすと、怪訝そうに見つめられた。ふわりと流れていきそうな視線に、酔わされそうになるのだった。

男を馬鹿だと思えば大間違いだ。たしかに色事に関しては阿呆になる面もあるかもしれぬが、女でも十分酔う。いい女というものはやはり生まれながらにしても素質を持つのだった。ある意味、いい女や美女とはみな生まれながらの娼婦なのかもしれない。春を売ることとは果たしてそれほど大きな罪悪なのだろうか。

「別に、大丈夫ですから。そんなに気を使わないでください」

大変なんだから、と恐らく言いかけたであろう麻の無邪気な言葉を寮母は遮った。麻は首を傾げる。無邪気な表情は、何も捉えていなかった。

ああ。

自分が今知っている事実を、すべてこの可愛らしい娘に吐き出してしまいたい！　ああ！　懺悔とはどのような快楽にでも勝るのではないだろうか！　あの痛みと心地よさは得体の知れぬほどのものに違いない。なによりも今この瞬間、寮母はそう確信する。より一層疑うような目線で麻に眺められ、寮母は理性を失ってとぼとぼと歩くのだった。

「あ、部屋……」

危うく寮部屋を通り過ぎそうになった寮母に声を掛けると、寮母は半ば押し込めるように麻を部屋の中に放り込んだ。一瞬、驚きの目が向けられる。なんでもない。なんでもない、きつとそうだ。心のなかでそう叫び、ドアノブをがちゃりと回した。

こんなに事故やら事件が多いと私まで壊れそう、ほんと冗談じゃないわよ。そう呟いた寮母は、珍しく壁など蹴飛ばし事務室へ戻ろうと踵を返すのだった。

「あささんあささんあささんあささん！」

「麻さんったら！」

部屋に入った途端、怒声が聞こえた。

「なに……？」

もう、既に疲れ果てている。麻はへたりとしゃがみこみ、そのまま這いずるようにして中へ入った。すると、まなみと伊里が大音量でテレビを見ている。珍しいな、と顔を上げると、大文字のテロップが目飛び込んだ。

「世紀の大女優、キャリー・ウールマン、事故死？」

思わず声に出した。すると、つられてまなみや伊里も叫びだす。なるほど。このふたりが騒いでいる理由は、これ。しかし、麻はどうにもこうにも力つきそうになっていた。不愉快な重みが臉を襲う。一生懸命寝まいと、眠気を押し殺した。

「そう。この近くで飛行機が墜落して。乗客は全員事故死だったそうです。それも、なぜかその航空機は自家用機で……」

違う、その航空機は自家用機じゃなくて自社用機なんだよ。そういかけた口を、慌ててふさいだ。間違いない。先ほど百合たちに聞かされた話といい、このニュースの墜落といい、絶対に此处が絡んでいるはずだ。そうなれば、キャリー・ウールマンも同乗していたという墜落機はもしや……。考えたくもなかった。けれども大き

な飛行機が日に二度落ちるなど、そうあることではない。あつてはならない想像に、脳がじわりと犯されていった。

「ちよつと、待ってて。私、依子さんに聞いてくる……」

どういふ状況なのだろう。確実に、自分だつて巻き込まれている。そう感じた麻が外へ出ようと寮の部屋のドアに手をかけた瞬間、それは回った。麻は目を丸くする。どうやら、ちよつとその瞬間に外側で誰かがドアノブを捻ったらしいのだ。彼女が慌ててドアから飛びのくと、見かねたまなみが室外へどうぞと声を掛けた。

「ごめーん。麻にお客さま。玄関で待つてらっしゃるから」

ドアを無遠慮に開いたのは、寮母だった。先ほどの深刻な表情がすっかり消えている。もしやまなみや伊里に現状を隠すためなのだろうか、麻は少し疑った。

「お客さまのお名前は？」

「ほら、いつもいらしてるあの方……。そうそう、菊果さんよ」

「お姉さんが？」

戸惑いながらも、麻は部屋を出てエレベーターに乗り込むと、一階へのボタンを軽く押すのだった。

ビロードの走るような紅色の絨毯の上を駆け、少し進むと綺麗な色の裾に突き当たった。ぶつかりそうになる。香水の香りに翻弄されながらも顔を上げると、少し困った表情の菊果と目を合った。こんなにちは。視線で挨拶を交わす。今日の彼女はともよそよしく、焦つてもいる様子だった。一体どうしたというのだろう。

「お姉さん？ 急にどうして……」

「麻ちゃん、あたし……」

そう言いながら、彼女は急に麻を抱きしめた。ふわりと温もりが麻の細い身体を伝う。思わず身を固くした。突然の出来事に驚いて目を見開きながらも、抱きしめられた体勢のまま、麻は再び菊果に言葉を要求する。

「あのさ、うち。もうあんたに会えないかもしれない」

「は？」

「だから、会えないかもって……」

「どういうことですか」

答えない。

菊果は絨毯に目線を落とした。ロビーを通り過ぎる者からの視線が集まったが、そのようなことなどまるで気にしている様子はなかった。少々立場が悪い麻はばつが悪そうに抵抗しようとしたが、菊果は背中に回した腕をさらにきつく締めるだけだった。その行動が、ますます麻を疑問に追い込む。一体、彼女に何があったのだろうか？ 何が、何が。行きかう人びとはみなきれいに着飾っている。高級そうなスーツ、ブランドものの鞆、磨かれた靴。けれども彼らの表情はそう美しくなかった。ロビーのきかされ過ぎた空調も相応し、あたりには冷たい空気が漂っている。麻は菊果に抱きつかれた体勢のまま、右足のヒールをくるりと半回転させた。

「あの、菊果さん」

まだ、返答はない。それでも泣いているようではなかった。どうも、何があったのか話が掴めない。否、そもそもが何も話していな

いので当然かもしれないが、麻には何ひとつ悟ることもできなかった。呆然とただただ立ち尽くしていると、不意に、菊果がくぐもった声で言った。

「うち……あんたと百合ちゃんに話すことがある」

麻の胸から顔を上げた彼女は、先ほどの泣き顔とは打って変わった表情をしていた。

「さて、と」

滅多に立ち入ることはない、百合の事務所。凝った家具がいくつも並べられたなか、まなみと伊里はひしめき合いながら、隅っこに立っていた。他には陽と依子、百合、そして麻と菊果が室内にいる。麻もまなみたちと同じく居場所がなさそうに隅に立っていたが、百合はソファの上で堂々と脚を組み、依子はその隣にちょこんと腰掛けている。陽はドアに背を預けたまま、絶望したように顔を背けていた。菊果だけが、真っ直ぐと前を向いている。恐らく、現在のこの建物のどこにも笑顔はないだろう。飛行機事故の件を聞かされた麻は、頭痛もする思いで口を開いた。

「あの、菊果さん」

「あ、うん。ごめん」

ぱちくりと菊果は大きな瞳を揺らめかせた。百合が、どうぞ、とも言わんばかりに小さく頷く。それを合図に、菊果は話を始めた。

「あのさ、言うけど」

深く、深く息を吸い込む。

「あの飛行機を墜落させたのは……うちやから」

そう呟いて、目を伏せた。

「あなたの言ってる意味が、よくわからないわ」

百合がきつい言葉を投げかける。菊果は目を伏せたまま、答えるように何かを囁いた。そして言う。

「うちは。あの女に、家族を殺されたから。だからうちもあの女の家族を殺した。それだけ」

さらりと言いのける。途端に、部屋の空気は変わった。まなみと伊里は硬直したまま、まるで時が止まってしまったかのように動かない。麻は小さく震えている。そして陽は相変わらぬ憂鬱そうな視線を動かすことはせず、依子は百合の膝に縋ったまま、こくりと喉を鳴らした。

「だから――。うちの夫と娘が。あの女……キャリー・ウルマンに殺されたから。だからその息子と娘と、夫を殺してやっただけ」
「待ちなさい。そのキャリー・ウルマンがあなたの夫を殺したって?」

飛行機事故で、キャリー・ウルマンは死んだ。ではなく、殺された! ああ、やはり自分の身の回りではこんなことばかり起こる。麻は項垂れた。思ったとおりだった。けれども百合は彼女よりもはるかに冷静で、当然ともいふべき疑問を投げかけた。

「じゃあ、あなたの死んだ家族は……。それよりあなた、花柳界の人間なのに。夫、って……」

「おかしいと思います? うちにだって、配偶者ぐらい、いる。娘

だつて」

「そうかもしれないけど……」

百合が腕を組むと、菊果は何かを決心したような表情で、顔を上げた。そして麻を指す。

「死んだのは、長女だけですけど。この子も、うちの娘」

へ、と。その場にいた誰もが、驚きと困惑の間抜けな声を漏らした。

（は？ 私が？ お姉さんの、菊果さんの娘？ そんなばかなことがあるわけない、ありえない。だって私が小さい頃から私は菊果さんをお姉さんと呼ばされたし、第一、私の両親はもう死んでいると聞いていた。それに、それに。顔だって、声だって、何一つ似ていないし。否、そんなことはどうでもいい。だけれど、私が菊果さんの娘のわけがない。絶対に、ない。ありえない）

麻は心のなかでどぎまぎとごまかすように何かを一心に呟く。けれども、それらは何の意味もなさなかった。ただ重く、菊果の発した「娘」という単語だけが耳に残った。

「戸籍上は、もう違うけど。この子は正真正銘うちがこのお腹を痛めて産んだ実の娘。麻——、ううん、ゆう子はうちの娘」

空気が凍った。伊里だけは事情もよく分からず、首を傾げる。けれどもまなみは驚きの果てに目を見開いて涙まで流し、俯いていた陽の顔はぼかんと上がった。依子はいくちびるを強くへの字に結んだまま、荒く呼吸を繋ぐ。そして百合は、真っ直ぐ麻の瞳を見据えた。みなからいっせいに視線を浴びせられた麻は、愕然とその場に座り込む。何よりも、ゆう子という名に反応させられた。

*

「ねーねー、麻ちゃん」

「なんですかー」

とある昼下がり。畳の上でまどろんでいた麻に、菊果が声を掛けた。

「あのさー。麻ちゃんのほんとの名前って、『ゆう子』なんだって」

「ゆう子？　へ？　私が？」

「そ。麻ちゃんの本当のお母さんがつけた名前が、ゆう子。『麻』ってのは宮村のお養母さんがつけたんだってー」

ふーん。麻は興味なさげに呟いたものだ。本当のお母さんなんて大嫌い、だって私を捨てたんだもの。ひどい。だから私のもとの名前がなんであろうと、私は、宮村麻なんだから。

そしてその後。母親による二度目の裏切りはすぐにやってきたのだった。

*

ふと、思い出した記憶。それは菊果に、名前がゆう子であると告げられた数年前のことだった。あの頃の麻はまだ幼く、あの置屋で下働きとして働いていた。そしてその後、ここへ売られたのだ。苦い記憶だった。唇をかみ締めると、その痛みが彼女を我に返した。

「……で？」

「そう。今日は全部、話そうと思って」

傍らにあった椅子に、菊果は腰掛けた。

「さつきも言った通り、この子はうちの、実の娘。それに関しては——んも嘘とかないから。言ったまんま。この子が生きてるほうの娘で、この子の双子の姉が、亡くなったほうの子」

誰よりも強くはつきりと、麻に視線を向けながら彼女は話す。

「その子の名前——幸穂っていったの。荒井幸穂。いい名前でしょう、幸穂はまだ小さい頃に死んじゃったけど……名前に見合う、いい子だった」

床を睨みつけるようにして、菊果は笑った。麻は寒気もする思いでびくりと肩を揺らす。誰もが信じられない、といった表情で俯いていた。その間にも、窓の外の木々は切なくさざめく。

「本当にかわいい子だった。明るくて、話好きで。うちはさ、自分がこんな立場やったし……。娘には、花柳界とか水商売とか風俗とか、売春とか。そんなこと、絶対して欲しくなかった。それで、明るく楽しく生きてほしかった。幸穂がもし生きてたなら、それを叶えてくれてたと思う」

だけど。

菊果は麻を再び見据える。

「あんたは違う。うちと同じ、醜い汚い娼婦崩れ。汚らしい血の流れる、恥の欠片。あんたはうちの恥。うちもあんたの恥。うちら母娘は、荒井の名を、幸穂を、汚す最低の存在。うち、何間違ったんかな。あんたをこんなにするつもりはなかったのに。なのにあん

たはまんまとうちの言いつけなんか聞かんと。宮村の家に残って女中として働いて、普通に結婚しろってあんだけ言ったのにね。あんたが今ここで、その肉体を売ってる理由は何？ 金のため？ 逃げたいとも思ってたんの？ それとも、そんな汚い存在になつてまであんたは、快樂と男が好きなの？」

麻は驚きと困惑で、先ほどよりさらに大きく目を見開いて、口をぽかんと半開きにさせた。菊果が吐いた言葉たちは、耳でもふさぎたくなるような、穢い罵りの言葉だった。結局、菊果は母親として娘を恨んでいたというのだ。涙が、あふれた。信用していた、愛していた。それなのに！ 身も裂かれる思いで、麻は自分の肩を抱きしめた。今すぐにでも、菊果の背中にすがりたいのに。けれどもそれは恐らく許されない。否、絶対に許されないことだろう。菊果は何よりも自身とその娘を軽蔑していたのだ。泣き叫んでそこら中にあるものすべてを投げ壊したいほどの大きな感情を麻は抱いたが、あえてそれを出すことはしなかった。黙って、菊果の話の続きを促す。

「……まあ、それはいい。どうだっていい。ともかく、16で娘たちを産んで以来、結構幸せだった。結婚は許されなかったけど、夫と考える男性がいて、娘達がいて。それも、壊されたけどね。置屋の女将に娘達を売って言われたの」

にこりともせず、言う。陽は耐えられぬように顔を両手で覆い、その場にしゃがみ込んだ。

「仕方なかった。だって、置屋の命令には逆らえないから。それで麻を宮村の家に売ったのよ。だけれど幸穂は絶対に売らせないって、夫が連れて行った。——思えば、その頃から幸穂とゆう子の差はついてたんかもね」

再び軽蔑のこもった目で麻を睨みつける。それを見たまなみが俯いた途端に、彼女の大きな目から涙がこぼれた。拳をきつく握り締める。今にでも、麻を抱きしめたい。大丈夫だと安心させたい。愛を、感じさせてあげたい。姉として信頼していた女に、突然母親だといわれた上にこんな罵倒まで受けるなんて――。できるならば菊果を今この場で殺してしまいたい程の怒りと感情だった。

「私は…、ゆう子じゃ、ないです」

震える目で麻がまごつきながらも呟いた。菊果は少し笑う。

「やんねー。荒井ゆう子は、もう死んでるんやし」

けらけらと、彼女はあの笑顔で笑った。まなみは一層この女がひどく憎らしくなった。なんて、なんてことを言うのだろう！ 娘に向かつて、よくこれだけのことがいえたものだ。菊果の態度は、今まで彼女が麻に注いできた友情也も偽りであったことを示していた。麻は、ただただ震えながら顔を背けた。見ればワンピースの裾をがっつちりと握っている。あまりの悲壮感に、百合までもが俯いた。

「ま、ともかく。それで幸穂と、旦那が去ってしまつて。それで、旦那が所属していた組織つてやつのこと、聞いた。それがさ、あんたらの敵の、ナント力つていう組織っぽくて。だから、うちもこの子も。敵の身内つてこと。あ、けどこの子はここの商売道具なんやしうちもこっちの身内か。いや知らんけどさ。でもどちらにせよ、うちはあの組織にこの上ない気持ちがありますから」

ただならぬ菊果の表情に、誰もがその気持ちとやらは好意でないことを悟っていた。当然だ。

「でね。状況考えたら、この話ほとんどない暴露になってるんやろうけど。常葉の一族は、もとからあの組織の関係者らしいね。あ、けどキャリア・ウルマンの長男……。耀さんよね。彼だけが裏切って此処に居るみたいね。結局彼は、うちの家族をめっちゃくちやにしてくれたけど」

あの、組織は。

正義感の強かったうちの夫の心に悪意を抱いて、その良心を蔑ろにした。

それこそ悪魔のような瞳で、きつぱりと菊果は言い放った。

「あと、聞かれる前に言っておくけど……」

俯きがちに菊果が再び口を開く。まなみがふと隣を見てみれば、麻の肩は弱弱しく震えていた。泣いている、のか。いや、それともこの状況で、少しばかり私よりも強いこのひとは、何を考えているのだろう。ただただ絶望に打ちひしがれているのか。それとも怒りや悲しみを単純に感じているのか。もしかすればあまりの衝撃に考えることさえできていないかもしれない。ちらりと様子を伺うようにまなみが麻の手をそつと取ると、麻は握られた右手を虚ろに見つめた。部屋のなかの空気が、また一段と冷えていくような気がする。白いワンピースは、翻らなかつた。

「うちは、知らない。なんであの人殺されたのか、なんで幸穂と一緒に殺されたのか。たぶん、何かに反抗したんやろうけど。でもその辺は何も聞かされてない。気づけば、遺体ともいえないような骨の破片が……、たくさん送られてきた……」

先ほどまでの残酷すぎる態度が一変し、菊果自身も耐え切れないような仕草で、顔を両手で覆う。誰もが、息を呑んだ。悲劇の母娘の姿は、あまりにも痛々しかった。

「うち、許せない。それこそ皆殺しにしてやりたいと思ったほどに。けどそんなことをしてる暇があるなら、もっと確かで正確な復讐をするための準備をしようと思った。そのこと自体が起こったのは、うちが母親ってことを隠して麻といたときのことなんやけど」

それでね。

「この子、使えると思った。顔だけなら幸穂にそっくりやし？ ま、可愛げはないけど色気はあるから存分に利用できるなって。現にこうしてるし。うちの勘はさ、鋭いんよ。やからこの子は使えるって思っでここまで持ち上げてきた。でも、案外役に立たんかった、いざとなると泣いてばっかやし何もできんし。正真正銘の役立たずだったのよね、この子。うちとあの人の間に生まれて、幸穂の妹だったのになーんでこんなアホなんやろうって。悔しかった」

ねえ。いつそ、あんたがあの人と一緒に行ってれば良かったのにね。そしたらうちはさ、幸穂を失わなくて済んだのに。あの子は誰にも代えられない、かけがえのない子だった。宝物だったのに。それなのに、今あるのはあんなだけ。何の役にも立たないただの泣き虫で頭の悪い男好きで淫乱で金食い虫なバカ娘だけ。うちはどこで間違えたんやろうかねえ、人生。大きな失敗に気づいた頃にはもう遅かったよ。

それだけ一気に喋ると、菊果は満たされたように深い溜息をついた。長い間溜め込んでいたものがすべて流れ出た瞬間だったのだ。麻は放心したように動かない。残された者たちはなす術もなく黙り込み、まなみに至ってはその場にへたり込んでいた。麻だけが、硬直したように壁に背を預けたままぽかんと口を半開きにさせている。そんな彼女の眼前に、さつと菊果が歩み寄った。覗き込むように、大きな瞳を見つめる。

「あんたなんか、最初から死なせておけば楽だったのに」

吐き捨てるようにそういい、菊果はぱつと麻の頬に両手で触れた。

「あの飛行機はね、うちが落とした。どうにでもなるもんよ、あん

なもん。ちよつと権力のある馴染みのお客さんに言うたら、すぐ」

にこりと笑う。室内の人間がみな啞然としている間に、さつと菊果は麻の隣で腰を低くした。

「あなたの名前。…ほんとは『麻』でも『ゆう子』でもなくて、『憂子』にしようと思ってたって言ったらどうする？」

「ま、色々役所が厳しくてゆう子になったけど、結局、よかったねあきれるほどに綺麗な笑みを浮かべ、菊果は麻の瞳を覗き込む。

「ばいばい。ゆーこ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145k/>

失墜

2011年2月2日23時50分発行